
90s nostalgia

木林タカシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

90s nostalgic

【Zコード】

Z2805W

【作者名】

木林タカシ

【あらすじ】

統計学的に述べると、美少女が現れるのは四月に多い。

さらに詳しく調べると、第一週目、すなわち学校の新学期が始まる直前の春休み。遭遇するのは高校デビューを控えた男子高校生である事例が最頻である。

美少女はほとんどの場合なんらかの問題を抱えていて、一見平凡な男子高校生には隠された未知の能力が備わっていたりする。八月の終わりに一番田のピークが現れる。これは夏休みが終了する時期と重なっている。

八月の美少女は四月の美少女に比較して転校生であることが多い。
しかし、これはそれほど大きな差異であるとは言えず誤差の範囲だ。
これらの事実は膨大なデータの蓄積から統計学的に導き出された。

膨大なデータについて。

それらはある種の偏りを避けるために多次元平行世界から無作為に
抽出された。

多次元平行世界とは……。

ドクター、ジニアの日誌より

更新は一週間に二回程度。

統計学的に述べると、美少女が現れるのは四月に多い。

さらに詳しく調べると、第一週目、すなわち学校の新学期が始まる直前の春休み。遭遇するのは高校デビューを控えた男子高校生である事例が最頻である。

美少女はほとんどの場合なんらかの問題を抱えていて、一見平凡な男子高校生には隠された未知の能力が備わつてたりする。

八月の終わりに一番目のピークが現れる。これは夏休みが終了する時期と重なっている。

八月の美少女は四月の美少女に比較して転校生が多いことが多い。しかし、これはそれほど大きな差異であるとは言えず誤差の範囲だ。これらの事実は膨大なデータの蓄積から統計学的に導き出された。

膨大なデータについて。

それらはある種の偏りを避けるために多次元平行世界から無作為に抽出された。

多次元平行世界とは……。

ドクター、

ジニアの日誌より

くるつと姿見の前で一回転。

空気を吸い込んだブリーツスカートが花びらのようにふわりと舞い上がり、絶対領域最終防衛ラインを賭けて危うい攻防が魅惑の生足戦場で繰り広げられる。

一度目は突破を許し、一度目は防衛網が堅固に過ぎた。

そして三回目。

防衛線は緩やかに後退を続け、危険領域ぎりぎりまで推移。だが、陥落寸前で息を吹き返し連戦連勝。オーバーニッソックスとスカートの間には秩序がもたらされた。

「よし。完璧」

クーヤは満足してひとつ肯いた。

紺色のブレザーと白いブラウスを整えて、姿見の中の自分を見つめる。

大きな黒い目をした抜群の美少女が微笑んでいる。

「うんうん。我ながらなんて可愛いらしいんだろう」

薄い唇から紡ぎだされる言葉は春のそよ風のように心地良い。

自分と他人に聞こえる声の間にはギャップが存在する。録音した自分の声を聞くと、違和感を覚える人が多いという話を聞いたことがないだろうか。これは骨伝導、つまり声の振動が骨を伝わるかどうかに由来している。

しかし、クーヤは全く違和感を覚えていない。何故ならクーヤは自分の声を録音して、何度も聞き直しがあるからだ。あくまで不自然にならないように、それでいて最高のパフォーマンスをもたらす美声を何日も前から研究してきた。ぬかりはない。

「ふふふ。ふふふ」

思わず邪悪な忍び笑いが口から漏れた。

「はつ。これはイケナイ」

クーヤは瞬時に表情筋を自在に操り、清楚な笑みを顔面に張り付かせた。肩にかかる髪を指ですく。

「あは」

邪悪さの欠片も感じられない美少女が鏡に映つていた。

高校デビューを翌日に控え、クーヤは制服を試着して最終チェックを行つていた。

ぱつと着替えて、ぱつと脱いで、素早く就寝。

そう思つていたのに、気がつけば一時間近く鏡の前で自分の姿に見とれていた。

いや、正確には自分の姿ではない。これは偽りの姿だ。

美少女としてあるべき作られた姿。いわゆる擬美少女。それが自分。だが、凡百のナチュラル美少女が束になつてかかつてきたところで己の敵ではないという自負がクーヤにはあつた。

ダイヤの原石。

それはそれ 자체が確かに価値のあるものだが、適切な加工を施さなければ美しく光り輝くことはない。

原石に興味を持つのは専門家、好事家の類で、一般人は光り輝いて見せなければ、その価値に気づくことはない。

だから……大丈夫。きっと大丈夫なはずだ。

クーヤは自分に言い聞かせるように、それが事実であることを確認するかのように、何度も心の中で繰り返す。

所詮はイミテーション。

絶対に美少女にはなれない。

そのことはクーヤ自身が誰よりも熟知している。しかし、引けない戦いというものがある。引いてはいけない戦いといつものがある。

クーヤはある男と賭けをした。

賭けの内容は、高校生活で誰からも「美少女ではない」ということに気づかれないこと。

クラスメート、教師、その他あらゆる人間から正体を隠し続けること。欺き続けること。演じ続けること。

それがクーヤに課せられた使命だ。

「スノットブの野郎。ぜつてー、目にモノ見せてやるからな」鏡の中の少女は瞳に熱い闘志をみなぎらせていく。

およそ美少女らしくない。

だが、これが本来のクーヤ。クーヤらしい表情だ。

クーヤは賭けをした。

賭けるものは

世界の全てだ。

偏心分離塔ユグドラシル。

それは世界の中心で長大な体をもてありますように、揺れて、たわんで、震えている。

一般的に塔と言えば、先端に向けて細くなつていくものと考えがちかもしれない。ところが、ユグドラシルは反対に上に向かうほど大きく末広になつていて、素人目にもバランスが悪い。設計者は余程ねじれた性格をしていたに違いない、と空也は思つ。

全体としては巨大なコップのように見えなくも無い。それが、ふらふらと酔っ払つたように傾きながら、コマのよつて回転している。昼も夜も関係なく回り続けている。回転速度は一定ではなく、そのことが見るものを一層不安な気持ちさせめる。

いまにも倒れそうだ。

今日こそ倒れるんじゃないか。

空也が区界 90s nostalgia に足繁く通つて いる理由の

一つは、区界の中心で威容を誇るユグドラシルを観察するためだ。不規則に運動するユグドラシルは、見るたびにその姿を変える。日に日に傾きが大きくなってきたかと思えば、次の日には持ち直していたりもする。まるで生き物のようだ。もしかすると空也はユグドラシルの最期を看取りたいだけなのかもしれない。

ユグドラシルの回転が速くなつてきた。時刻を確認する。

午後九時……三分前。

毎日、この時間になると、ユグドラシルはそれまでの不規則な動きが嘘のように、規則的な動きに変じる。一分一秒狂うことなく、時計の針のように正確に時間を遵守する。

踊るようにぐるぐる回りながら、回転速度を徐々に増していく。塔の上半分、その外壁からによきによきといくつも砲身が伸びてきた。成人男性が入れそうなものもあれば、せいぜいごぶし大のボルくらいしか入らなさそうなものまで。大きさはマチマチだ。砲身の位置は日によつてランダムに変化している。

午後九時……三十秒前。

ユグドラシルが唸るように不気味な咆哮を上げる。全身が淡く輝いて、回転は一段と鋭さを増す。砲身は大も小も天を突かんばかりに空を指している。その姿は調和とはほど遠く、どちらかと言えばグロテスクだ。生物的な造詣がそう感じさせるのだろう。

午後九時……ジャスト。

ユグドラシルが脈動する。

根元が風船のようにぼつぼつと膨らんだ。それはうねり、暴れまわりながら、塔内部を駆け上つていく。そして、瞬く間に砲身に達した。

ばひゅつ！ ばひゅ！ ばひゅ！

砲身が火を吹いた。

飛び出してきたのは光り輝く球体だ。大小さまざまな弾丸。それが火の玉のように激しく燃え上がり、空いっぱいに広がっていく。遠

心力とコリオリの力が働き、放物線を描きながら、空也の頭上はるか遠くを飛び越えて、区界の外縁部に消えていった。ユグドラシルはまるで歓喜に打ち震えているかのようにビクビクと痙攣している。

空には飛行機雲のような白い軌跡だけが残つた。

「きみも好きだねえ」

空也の側らに男が立つていた。

黒い細身のスーツの上に白衣を羽織つて、レンズの小さなサングラスをかけている。顔には無精ひげ。

「いいだろ。べつに」

空也は男のほうを見ずに言つた。

男は「くつくつ」と喉を鳴らしながら、サングラスをはずし胸ポケットに入れた。端整な顔立ちをしている。年齢は三十歳くらいに見えるが、実際はもう少し若いのかもしれない。無精ひげを剃つた男の顔を空也は数えるほどしか見たことが無かつた。

「まあな。メインはこのあるとだしな。行くだろ?」

「行かない。何度目だよ。このやりとり」

空也がうんざりしてため息をついても、男はニヤニヤと笑つてゐる。身をくねらせながら「ええー」と大げさに驚いて見せた。はつきり言つて気持ち悪い。

「じゃあ、何しに来てんだよ。美少女を拾いに行かないで、90s no st a 1 gyaに来る意味あんのか?」

「スノップには関係ないだろ」

「それを言われるとつらいなあ」

スノップは全然堪えた様子も無く、白衣のポケットに両手を突っ込んで、ユグドラシルを眺めている。

男は自称、天才科学者で名前は……忘れてしまつた。

初めに自己紹介されたが、あまりに鬱陶しく付きまとつてくるので、尊敬と侮蔑を込めてスノップと呼んでいる。スノップは90s n

ostalgiaに関する知識は人一倍持っている。空也はその点に限つてだけは密かに一目置いている。

「美少女はいいぞー。世界は美少女でできている」

「そのわりには、人いなideどな」

「酷いや。そんなこと言ひ子はおしおきしきやうだぞ」

「キメニよ。なんなの？ そのキャラ。地なの？」

「地です。諦めてください」

スノッブはうそ臭い笑みを浮かべている。スノッブ本人をいくら貶しても効果は薄そうだ。空也は攻め方を変えることにした。「美少女たつて、どうせ劣化コピーの産業廃棄物が埋まつてるだけだろ。いまどき美少女なんて流行らねーんだよ

「れ、劣化コピー。さ、産廃……」

スノッブ絶句。顔面が引きつけを起こしている。

「そ。劣化コピーで産廃。当たつてるだろ？ 最初の頃は、物珍しさもあつて美少女拾いに行つてたけどさ。もつ飽きちゃつたんだよね。なんていうかテンプレ？ 特定の行動に対しても決まつた反応が返つてきて…… よーするにつまんないんだよ」

畳みかけると、スノッブは額に手を当ててよろめいた。

「スノッブだつてわかつてんだろ。見よつぜ、現実をさ」

「……今日はいい天気だなー」

背中を向けて千鳥足で逃げようとするスノッブの前に空也は回つこんだ。

「だーかーらー。現実を見ようぜ。げんじつを」

「なんだよー。俺は知つてんだぞ。空也が毎日来てる理由」

口を尖らせでスノッブが言つた。

「はあ？ ノグドラシル見に来てんだよ、俺は」

空也にはやましいところなど無いし、あつたとしてもスノッブに知られているわけがない。そう思つていた。

「……ナズナ」

だからぼそりと呴かれた単語に、一瞬胸がドキッとした。

「な、ナズナは関係ねーよ」

「劣化コピーってことは、オリジナルがあるんだろ。ナズナに告げ口しかやおうかなー。空也はナズナに会いたくないって」

スノップはある種の確信を持つているらしい。だからと言つて認めるわけにはいかない。認めたら最後、どんな嫌がらせをしてくるかわかつたものではないからだ。

「会いたくないなんて誰も言つてないだろ」

「うん？ 図星？ 青いねー」

スノップは白い歯を見せて二カつとした。

「劣化コピーは言葉のあやだつて。オリジナルはもつと別。……例えばファイとか」

内心の動搖を押し隠すように言葉を並べる。

「ファイ、か。確かに昔から人気だけど……お前の趣味そんなんだつたつけ？」

スノップの切れ長の瞳が空也を踏みするように見ている。空也は目を逸らした。

「ま。いいか。それならそれで」

スノップは頭の後ろで手を組んで空を見上げた。

追求の魔の手が伸びてこなかつたので、空也はほつと息をついた。

「劣化コピーで、産廃……ね。そこまで言うならお前も。ひとつ美少女やってみろよ。飽きたほど美少女を見てきたなら簡単だろ？」

「なんで俺が……」

空也の質問を無視してスノップは話を続ける。

「もし三年間の高校生活で完璧に美少女を演じきいたら、世界の半分なんてケチくさいことは言わずに全部お前にやるよ」

「何を？」

空也は乗せられていくとわかつていても聞き返さずにはいられない。スノップが持つてくる話は大体いつも面白いからだ。その難のある

性格にさえ目をつぶれば、スノップは概ね付き合いやすい男だった。

「ここを。90s nostalgicを」

「ハツ！ 何を言い出すかと思えば。ここは誰のものでもないし」
空也が鼻で笑つても、スノップは意外と真剣な目をしている。

「実際には、俺とお前とナズナの三人しか利用していないんだ。俺
がいなくなれば、あとは一人で好き放題できるぜ」

「それは……」

魅力的な提案だ。

言葉には出さなかつたが、空也の心は傾いていた。

「賭けようぜ。お前が誰にも男だとばれずに三年間高校生活を過ご
せればお前の勝ち。途中でばれるようなことがあれば俺の勝ち。負
けたほうはここから出て行く。わかりやすいだろ？」

「わかりやすいけど……なんか裏がありそうだな」

「裏？ ナズナと一人つきりの時間を邪魔されたくないのはお前だ
けじやないってことだ」

賭けに乗ることは、認めることと同義だ。

だから……だからこそ空也は迷わなかつた。

スノップにだけは負けられない。

「受けて立つぜ」

空也は静かに右手を差し出した。

「男と男の約束だ」

スノップは空也の手を取つて、固く握り締めた。

あとから冷静になつて思い返せば、その賭けは空也にとつてはリス
クが大きい反面、スノップにとつてはほぼリスクがないのだった。

スノップ許すまじ。

「ふむふむ。なるほどねー。私の知らないところでそんなことを
白い瀟洒なテーブルには純白のレース。

二つのグラスにはコバルトブルーとエメラルドグリーンの液体。
細い指が海色のグラスに添えられ、白桃のよつた唇がストローに触
れる。

「そなんだよ」

空也もグラスを手にとつて、少しだけ喉を潤した。

少女は物憂げに目を伏せて頬杖をついた。グラスの中身をストロー
でひと回しすると、重なり合つた大粒の氷がぶつかり合つてカララン
と音を立てた。

「そつかー。そつかー。なるほどねー」

限界まで溶け込んだ炭酸が気泡となつて大気中に逃げ出していく
にも構わぬ、少女はグラスの中身を攪拌し続けている。

「あの……ナズナ、さん？ もしかして怒つてらつしやる？」

「べつにー」

そうは言つもの、ナズナは視線をグラスに落としたまま、焦点の
定まらない目をして氷を溶かす作業をやめるつもりはないようだ。
薄い笑みを浮かべているのが、空也にはたまらなく恐ろしい。

「ソーダ。炭酸抜けると、おいしくないと思うよ」

おそるおそる、あくまで逆鱗に触れないようになつたまま、焦點の
とを言つと、ナズナは満面の笑顔。空也もつられて笑いそうになる。
しかし、ナズナは何を思ったのかグラスを両手で抱え上げると、そ
のままぐいっと一気飲み。ドンッとテーブルにグラスを置く。

「おいしいよ？」

ナズナの完璧に整つた笑顔を前にして悲鳴を漏らさなかつた自分を
誉めてあげたいと空也は思った。

「ソウデスカ」

彫像のよう^{マッドハッター}に固まりはしたが、人間に理解可能な発声を成し遂げたのもまた偉業と言えるかも知れない。

「一言くらい相談してくれてもいいんじゃないかなって思うの。男の約束だか何だか知らないけど」

ちなみに空也がナズナに説明したのは表向きの理由だけだ。

90s nostalgicの領土権を賭けてスノップと勝負する。高校生活を通して美少女を演じ続けられれば勝ち。誰かに見破ら^{マッドハッター}れば負け。

それだけを伝えたのだが、そのことがナズナには不満に感じられて仕方がないようだ。

どこかに不自然さがあつたのかも知れない。隠し事をしている後ろめたさをなんとなく嗅ぎ取られてしまったのかも知れないが、だからと言ってナズナにありのままを伝える勇気を空也は持ち合わせていなかつた。

「仲間ハズレにされて悲しい。この悲しみはちょっとやせつじや癒せないわ。ああ、心が痛い。張り裂けそう。死ぬー」

大げさに片手を胸に当てて、空いた手を宙に飛ばしてナズナがうめいた。

それで空也は安心した。ナズナは怒つていない。

「私のお茶会がー。徹夜で衣装作つてきたのにー」

「そうなの？ この衣装」

ナズナは白い丸襟ブラウスに黒いジャンパースカート。頭にはヘッドドレスを装備してゴスロリ風の姿を装つている。

空也はナズナに言われるままに黒い燕尾服を着てシルクハットを被つていた。

不思議の国のナズナとイカレ帽子屋というシチュエーションを再現しているらしい。

「そんなわけないじゃない。こんな作れないってナズナはペロつと舌を出した。

「でも、楽しみにしてたの。スノップとの賭けなんてどうでも良

「いから、まずは感想を聞きたかったかな」

ナズナは立ち上がりスカートの裾をつかんで見せた。

「どうかな?」

恥ずかしそうに肩を寄せる。

女の子は……ナズナはする」と空也は思つ。

空也は何度かナズナのコスプレパーティーに付き合つてゐるが、一度だつてナズナの顔をとともに見られた試しはなかつた。

普段はそうでもないが、意識させられると恥ずかしくなつてしまつた。

「いいと思つ」

だから、こつもお決まりの台詞を言つしかない。

「ホント? 本氣で言つてゐ?」

息がかかるほど近くからナズナの声がする。空也の田の前にナズナがいる。

肌理の細やかな白い肌や、ほんのりと色づいた柔らかそうな頬に田を奪われる。睫毛は驚くほど長く、目が合いそうになつて空也はつむくしかないといつのに、ナズナは全然気にした様子が無い。それは、ナズナが空也のことを特別に思つてはくれていないとのこと。

だから、空也も何でもないといつ風に装わなくてはならない。

「顔、近いつて」

無理だ。心臓がバクバクする。

「近くで見ないとわからなくな?」

「そんなことないから」

無自覚拷問人の称号をナズナに授けよ。と、馬鹿なことを考えて氣を紛らわせるくらいしか、空也には取れる術が無い。

「そんなもんか」

ナズナは満足したのか、席に戻つていた。

「しかし女装とは、また……」

ナズナはしめつめらしい顔をして、空也の全身を上から下までなめ

放物線を描いて、白い筋を残して飛んでいく。

そして空也は激突した。

光球だと思ったものは体を丸めた人間で、それが高速回転しながら自分に接近していると気づいたときには、既に何もかもが手遅れだつた。

少女は両手を翼のように広げ、両足をピンと伸ばし、空也の脳天にドロップキックをかまして

「いたーい」

と、叫び声を上げた。

スカートの奥の逆三角形は空色縞々ストライプ。

「なんで着地地点に人間がいるのよ。おかしいじゃない」
土煙を上げて地べたを転がり、仰向けに倒れた空也に向かつて毒づいた。

少女自身は空也の頭を踏み台にして、空中で姿勢を制御。華麗な着地を遂げていた。

「あのー。生きてますかー」

物理的に死ぬことのない世界だとこいつとは空也もわかつていい。だが、あんまりと言えばあんまりな物言いに空也は死んだふりをすることにした。

「パンツ見てたの知つてますよー。女の子のパンツは命よりも重いんですよー」

頭のおかしな女とは関わり合いになるな。
空也の理性が冷静に告げていた。

死んだふりを続けるのが得策だと思つた。

「運命的な出会いのあとは……え、マジで？ ありえなくない？」
しかし、ぶつぶつと呟く独り言の内容が気になつて空也は薄目を開けた。開けてしまった。

心臓が止まるかと思つた。

空也の目と鼻の先に女の子の顔があつた。それもどびつきりの美少女だった。

「はわつ」

鼻腔から変な息が漏れた。

「あ。やっぱり死んでなかつた。あー、良かつた。ファーストキスの責任なんて重過ぎ」

少女は起き上がり、片手に持つた本をぱたりと閉じて放り投げた。本は地面に落ちる前に空間に吸い込まれて消えた。

「ようこそ。90s nostalgiaへ！」

少女が差し出した右手を空也は取ろうとしたが、その手は宙を切った。

「なんてね。そんなキャラでもないのよね

「お前……友達いないだろ」

空也は立ち上がり、体についた埃を払つた。

「初対面の人に向かつて放つ第一声がそれ？」

「初対面の人に向かつて、ドロップキックはどーなんだよ

「パンツとドロップキックで相殺でしょ」

「色気の無い縞パンなんかに興味ねーです」

空也が何気なく言つと、少女はぱつとスカートを抑えて数歩あとずさつた。心なしか顔が赤くなつてゐる。

「な、なんで知ってるのよ

「なんでつて……パンツとドロップキックで、水色ストライプで……」

⋮

「思い出さなくていいから

少女は顔を両手で隠して耳まで赤くなつてゐる。

可愛い女の子だった。しかし、着ている服が独特だった。デザインは一見普通の学生服のように見えるが、色がおかしい。上は薄いピンク色でスカートは紅色をしている。校則の緩い私立学校の生徒なのだろうか。

「お取り込み中のところスミマセンが、自己紹介しませんか？」

空也が声をかけると、少女はまじまじと凝視してきた。天地神明に誓つて後ろ暗いところはないと断言できるが、なんとなく居心地が

悪い。

「俺は空也。君は？」

「……ナズナ」

それが一人の出会いだった。

「おーい。何トリップしちゃつてんの？ 男が一ニヤニヤ思い出し笑いとか、はつきり言つてきもいよ」

ナズナがジト田で空也をにらんでいた。

空也は誤魔化すようにジユースを口に含んだ。

「どうせパンツのことでも考えてたんでしょ。何なら見せたげよっか？」

食道を下るはずの水流が分岐点で迷走して気管のまゝへ向かった。直訳するとむせた。

「うわっ。ばっちい。まさかホントに考えてたの？」

ナズナは若干引いているが、ハンカチを差し出してくれた。空也は受けとつて口元を拭う。

「使用済みだから、それ。未使用より価値があるはずだよ」意味ありげに笑っているナズナを見て、空也は嫌な予感がした。丁寧にたたまれたままのハンカチを広げてみる。見事な逆三角形。純白、シルク、レースつき。

パンツだった。

パシャツとシャツター音がした。

ナズナがカメラを片手に爆笑していた。

「あつはっは！ いまの顔サイコーだったよ。空也君は毎回リアクションが良いから、仕込みがいがあるなあ」

「……ですか。洗つて返すね」

「もー。怒らないでよ。『ごめん』ごめん。未使用の新品。いい匂いするでしょ。香水つけてみたんだ。匂つてみてよ」

「匂つてみてつて……」

空也は改めて両手でパンツを広げてみた。

白い。

顔を近づけて鼻をくんくんとさせている自分を想像してみる。犯罪の匂いがした。

「どにからこうこう発想が出てくるの?」

「漫画とかアニメ、かな? あとはラノベとか? 図書館にこぐらでも藏書があるじゃん」

空也はパンツをテーブルの上に置いて、丁寧に四つ折りにした。少し迷つたが、ポケットに突っ込んだ。

「あー、持つて帰っちゃうか。そうかー」

「どうしようってんだよ! どうして欲しいのー?」

しみじみと呟いていたナズナの口が丸くなつた。

「あ……なんか、」めん

「ううん。そんなことないよ。私もちょっと調子に乗りすぎた。ほら、もう少しで学校始まるじゃない? そうしたら会えなくなるのかなつて。そう思つたら、なんか記念になるものでもあげたほうがいいのかなつて」

「それで……パンツ?」

ナズナと白い布を交互に見て、空也はためらしながら発音した。「なんだか考えてるうちにわけわかんなくなつちゃつて。それ……

勝負下着

ナズナの声は最終的に聞こえないくらいまで小さくなつてしまつたが、空也の耳はその単語を正確に拾つた。

ナズナは横を向いて決まり悪そつにしている。脳みそが煮沸された。

「しようぶしたぎ?」

咄嗟に漢字変換できない。

「やうよ。悪い?」

試すようなナズナの視線に、空也は首を振つて答えた。

「それは……」「ちそうさまです」「いいえ。おそまつさまでした」

二人でお辞儀しあつてしまつた。

ナズナは顔の横でぱたぱたと手を振つて風を送つている。

「調子狂うなあ。計画通りにはいかないもんね。体を張つたギャグつて難しい」「ギャクだつたの？」

空也は椅子からずり落ちそうになつた。

「どつちでもいいじゃない。新生活、応援してゐる。せいぜい女の子頑張つてね」

ナズナはそう言つと、空間に溶けるようにして姿を消した。

「わっかんねー」

椅子にもたれかかつて空を仰ぐ。

「お前はアホか……」

声につられてテーブルに視線を戻すと、ナズナの席にスノップが座つていた。

「なんだ。いたのか」

「これだから若いやつらはヤだねー。一人の邪魔をしないように、こつそり陰から見守つてはいたつていうのに。ナズナ、最近冷たいんだよね。どうしたら昔みたいに懐いてくれるのかな。どう思つ?」指で「の」の字を書きながらじけているスノップ。ひたすらうざい。

空也は視界からリムーブすることに決めた。スノップの姿が薄くなつていく。

「あー、てめえ。何しやがるつー」

「うつせーよ。消える消えろ」

空也はスノップからの干渉を一切受け付けないようにプロックすることにした。声も聞こえなくなつた。

干渉されたくないれば、接触を絶てば良い。

それが可能な時代に空也は生きていた。

世界は断片化してしまった。

それは二十一世紀に発生した。

それはカツプラーメンがお湯を注いで三分で出来上がるくらいには確からしい歴史上の事実で、五分で出来上がったとしても、伸びきつてしまつたとしても、個人の主観的にはそれほど大した問題ではなかつた。

だから、正確には二十一世紀ではなかつたのかも知れない。

だが、何はともあれ世界は断片化してしまつた。それだけは確かだ。原因は世界に情報が氾濫し、世界の処理限界を超えてしまつたことにある、らしい。

高次元宇宙からの侵略だという説もある。

四次元、五次元、六次元……もしくはさらに高次元の世界が相手だつたのかも知れない。

この説はある程度の支持を得ている。

というよりは、三次元から他次元への移動が個人の裁量で行われているから、経験則として受け入れられている。

これが本当のソーシャルダンピング、なんて馬鹿げたジョークが一時期流行つたそうだ。

世界は錯綜している。

世界は並行的で、どこへ行くのも個人の自由だ。

そして僕らは生活の基盤を失い……

地に足がつかないまま、日々を過ごしている。

入学式が終わり、クラスでの自己紹介もつづがなく終えて休み時間。クーヤはひとまず安堵していた。

男の体から女の体へ乗り換えるのは、意識の持ち方を変更するだけで誰にでも可能だ。断片化以降可能になつた。

しかし、空也の無意識は自分を男だと認識しているので、クーヤの体を絶えず男の体に戻そうとする。つまり意識していなければ、自然と男の体に戻つてしまつということだ。

わざわざ精神に緊張を強いてまで、自分の本来の性別と異なつた肉体を纏おうとする人間は稀だ。

異性の肉体への興味？

無意識の強烈な振り戻しによって、体は本来の性別に戻つてしまう。つまりエロいことはできない。

何人もの先人が挑戦しては挫折を味わつた。現在も挑戦するものはあとを絶たない。

空也も例に漏れず、男子高校生の思春期真っ盛り。何度挑戦しても煩惱に負けて上手く変身できなかつた。あまりの酷さに見かねたスノットから錠剤がいっぱいに詰まつた小瓶を渡された。

赤と青のコントラスト。

赤色の中に青色が混じつている。

赤い薬を飲めば女になつて、反対に青い薬を飲めば男に戻れる。

薬の効き目は約六時間。個人差がある。

スノットが出し渋つたのは、薬を乱用するといざといざ時に戻れなくなるから、ということらしい。

クーヤは自分の胸元を見下ろした。

丸く膨らんだ双丘がブラウスを押し上げている。

股間に男性のシンボルは無い。

そのことを意識すると顔が火照つてくるが、同時に体は男性に戻ろうとし始める。薬はあくまで補助剤。結局は意思の問題だ。

クーヤはぶんぶんと頭を振つて邪な雑念を追い払つた。

「クーヤさん。どこか具合でも悪い？ 気分でも優れない？」

「大丈夫です。心配してくれてありがとうございます」

話しかけてきた女子に笑顔を向ける。

実は良く見知った顔で、以下のところ一番の懸念材料だつたりする。

「クーヤさんって、私の知り合いと同じ名前なんだ」

「そうですか。珍しいこともあるものですね」

まさか同じクラスに彼女がいるとは夢にも思わなかつた。それに緊張してて周りが全く見えていなかつた。自己紹介の前にもつと凝つた名前を考えておくべきだつたと、クーヤは後悔しきりだつた。

「女の子でクーヤって珍しい名前だよね」

クーヤの思惑とは正反対に、むしろ積極的と言つてかまわないほど話しかけてくる。

彼女にその気が無いのはわかつてゐるが、まるで尋問されてゐるような気分だ。許されるなら今すぐにでも話を切り上げたい。しかし、それはいくらなんでも怪しすぎる。自分から不審者です、と名乗りを上げるようなものだ。当たり障りの無い会話を続ける以外の選択肢が取れない。

「本名は女子らしき名前なんです。だからS/Nは男っぽい名前にしようと思つて」

ちなみに個人情報保護の観点から、学校では匿名を使うことが推奨されている。

それがスクールネームだ。

「へー。私のS/Nは本名まんまなんだよ。もつと色々考えたら良かつた」

「そりなんですか？ 唯さんって素敵な名前だと思いますよ」

「あれ？ 私の名前言つたっけ？」

唯が怪訝そうな顔をする。

クーヤは顔に出さないよう努めているが、内心はひやひやものだ。唯は昔から妙に勘が鋭いところがあつた。

昔、まだ一人が小さかつたころの話。

空也は誕生日のプレゼントとして唯におもちゃの指輪を贈つたこと

があつた。しかし、どこの隠しきつけたのか、空也よつも唯のほうがそわそわしていて非常に渡しにくかつた。

そのくせ自分は空也の誕生日にプレゼントを用意してることなどおぐびにも出さない。そのうえ渡されるものは空也の欲しいものだつたりするから余計に驚かされる。毎年のように繰り返されるので、流石にここ数年は慣れた空也だったが、子供のころは不思議で仕方なかつた。

「あはは。クラス全員皿口紹介したじゃなことですか。やだなあ、もうう」

「あー。うん。そうだった。そうだった」
唯は納得していない。顔は笑っているが、心から笑つてゐるかどうかくらい長年の付き合いから推し量れる。笑つて誤魔化せられる相手なら苦労はしない。

空也と唯は三歳の時からのお付き合い。

クーヤとコイは三分前からのお付き合い。

男と女。女と女。

「唯一の唯なんて、ホントに素敵」

自己紹介なんてろくに聞いていなかつたが、唯とならなんとか話を合わせられる。それを考えれば、むしろ話しかけてきたのが幼なじみで良かつたのかもしれない。

「うーん」

唯は首を捻つていていたかと思うと、

「私はカタ力ナでコイって自己紹介したと思つんだけど」
しつと爆弾発言をかましてくれた。

クーヤの背中を冷や汗が駆け下りていつた。

「あ、あれ。そうだつたかしら。勘違いしてたかも」
慌てて取り繕つたが、唯の疑惑はかえつて強まつてしまつたらしく、じーっと半眼で見つめてくる。

「コイと聞いてぱつと出でるのが唯一の唯だつたからかも」
顔色をうかがいながら苦しい言い訳。

「そうなのかなあ。何か隠そうとしてない？」

「してない。してないって。隠すも何も、私はユイさんと初対面だし、隠すことなんて全然ありませんよ」

「そりなんだけど……なんか引っかかるんだよねえ。知り合いが私に隠し事してる時の雰囲気とそっくりなの。それだけじゃないよ。なんとなくなんだけど、纏っている空気？ 似てる気がする」

似ているも何も、あなたが頭に思い浮かべている人物と目の前にいる女の子は同一人物です。と、クーヤは心の中で独白した。
唯のつま先はグレーゾーンを越えそうになっている。ブラックゾーンに踏み込まれる前になんとかして方向転換させなければ。それができなければ、スノッブとの賭けは空也の惨敗だ。一日すらもたずくに看破されたとあっては末代までの恥。

クーヤはがしつと唯の手を取った。

「え？ え、なに？」

「実は隠し事してるんです。クラスに知ってる人、一人もいなくて。それで緊張しすぎて具合悪くなつてたの。だからユイさんが話しかけてくれて嬉しかったんです」

さも重大な秘密を打ち明けるように、唯だけに聞こえるように囁いた。

内心の動搖も手の震えとなつて伝わっているはずだ。動搖している理由は唯本人のせいだが、この際それはどうでも良い。

「そんな大げさだよ」

幼なじみの性格の良さを利用するようで後ろめたくもないが、そんなことは言つていられない。とどめの一押しをする。

「ユイって呼んでもいい？ 私のことはクーヤって呼んで」
捨てられた子犬のような目をして唯を見つめる。

「……クーヤ」

唯はクーヤの手を優しく握り返した。

「うん。クーヤ。最初に友達になれたのがユイで良かった」
「ともだち」

クーヤが微笑みかけると、唯はぽーっと熱に浮かされたような顔をした。

予鈴が鳴った。

「私、席に戻るね」

唯は名残惜しそうにしながら、自分の席に戻つていった。

美少女クーヤの魅力の虜になつたのは、誰の目にも明らかだつた。

チョロいぜ！

と、思ったクーヤだつた。

それから数日間は何事も無く過ぎていつた。

内気な控え目美少女クーヤを演出しつつ、話し相手はほぼ唯という学園生活を続行中。何かあつてもうひとつは困るので、クーヤとしては願つたり適つたりだ。

風景に溶け込むように日々を送る。

それがクーヤの取つた戦術だつた。

隠れ潜む擬美少女としては正しい姿だ。

だが、クーヤは早くも飽きてきていた。張り合ひが無むを過ぎる。

「他愛ないものね」

「どうしたの？ 急に」

机を囲んで昼食タイム。メンバーはクーヤと唯の二人きり。

「ああ？ いや、こっちの話」

「ふーん」

唯のお弁当は一段重ね。タコさんウインナーとだしまき卵。きぬさやが彩りを添えている。

クーヤはサンドイッチの包装をぴりりと破る。

「……つまらない。そんな顔してるとよ」

唯がタコさんウインナーを箸に乗せて何気ない仕草でクーヤのほう

に突き出してきた。特に何も考えず「ごちそうになる。

「よくわかるね。たまにエスパー発揮するよね。エスパー唯つて呼ぼうか」

「エスパー？ よくわからないけど」

「あー、うん。わからなくていい。変なこと言つた。古い漫画の話だし」

スノップのせいだ。

エスパー・マミー。全六巻。

90s nostalgicのアレクサンドリア図書館に所蔵されている。

シリアルキラーに殺された少女がゾンビとなつて蘇り、超能力を駆使して殺人事件を解決していくミステリーバトルアクション。少女は事件解決ごとに犯人に噛み付いてゾンビ化させ、仲間を増やしていく。

悪とは何かを考えさせられる良作だと思うのだが、途中で打ち切られていた。

「古い漫画？ 気になる」

「ちょっと待つてて」

クーヤはアレクサンドリア図書館のアーカイブスにアクセスしてエスパー・マミーの一巻を引っ張り出してくる。ふと気になつて、閲覧履歴を確認する。

空也、スノップ、スノップ、スノップ、ナズナ、スノップ、スノップ、スノップ、スノップ、スノップ、スノップスノップスノップスノップスノップスノップスノップスノップ……見るのを止めた。

好きすぎるだろ、スノップ。

「これ。興味があつたら読んでみて」

受け取つた唯の顔が曇つた。

首から激しく血のシャワーを迸らせる少女。白目をむいている。表紙のインパクトは抜群だ。

「うん。わかつた」

唯はすぐに笑顔を取り戻して、電光石火で漫画を鞄の中に押し込んだ。

「そんなに慌てなくても、誰にも取られないよ」

「クーヤつて……もしかして天然？」

「まさか」

「そうだよね。 そうだと思った。 食事中にスプラッシュ渡されるなんてびっくりしたあ」

クーヤは小首を傾げた。

唯も鏡のようすに小首を傾げた。

そして週末。90s nostalgic。

「あはははははっ！ なんなの、それ。面白過ぎー。」

ナズナはお腹を抱えて爆笑している。

空也が話し始めたときには興味なさそつた顔をして携帯ゲーム機をいじっていた。それを考えると喜んで良いのかもしれないが、なんとなく釈然としないものを感じる空也だった。

「面白いかなあ」

「面白いって。ひひつ」

空也はテーブルの上のバスケットに手を伸ばした。クッキー や ラスク、チョコレートなどが雑多に放り込まれている。適当にラスクを選んでボリボリとほおばる。小さな幸せが口の中を満たした。ナズナは肩を震わせながらティーカップを口元に運んだ。フーフーと息を吹きかけている。猫舌で熱いのが苦手なようだ。

その日の一人は魔法使い。

空也は黒いローブに三角帽子。ナズナは白いフード付きローブを着ている。

フードは切り立つた山が一つ寄り添つような形をしているせいで猫耳っぽく見える。

「尻尾とかつけると……」

さらに猫っぽくなるかもしれない。

「は？」

空也の温かい妄想にナズナの冷たい視線が突き刺さっていた。

「そういうのが好みなの？ 空也が言つならつけてあげてもいいよ

「……いらないから」

誤魔化すようにレモンティーで口を塞ぐ。ほろ苦い。

「意地張つちやつてー。にやんことくらうとか読んでそつだもん」
ナズナの当てずつぽうな指摘は嫌なことに的を射ていた。

空也はスノップから薦められて三巻まで読んでいるが知らないふりをする。

淡い色調で猫耳幼女が描かれている表紙はエスパー・マリーとは別の意味で高い攻撃力を誇るからだ。

……主に性的な意味で。

空也としては女の子と一人で話すのは避けたい類の話題だった。

「隠したって閲覧履歴見ればわかるのににゃー。どうしてそんなつまらない嘘つくのかにゃー。わからないにゃー」

「わからないでよつ！ せめてわからないふりしてよつ！ にゃー、にゃーって明らかにナズナ読んでるよね！」

「にゃあ。読んでないにゃー。空也の趣味に合わせて、衣装をセッティングとか絶対してないにゃー。邪推しそぎだにゃー」

にゃーにゃー言いながら、ナズナは楽しそうに笑う。

手の平で踊らされている感は拭えないが、不思議と嫌な気持ちもない。

「はいはい。認めますよ。猫耳尻尾つけたナズナさんが見たいです」「空也が投げやりに言つと

「こまるにゃー。えへへ」

ナズナは丸めた手で顔を洗う仕草をしてはにかんだ。

スノップ経由で空也に回ってきたものは、もれなくナズナも目を通していると思つたほうが良さそうだ。

ところで、空也が気になつているのはナズナとスノップの関係だ。年齢は離れているし性別も異なる一人。共通点は特に見当たらない。空也は一人に何度も尋ねてみたが、その度にはぐらかされてきた。少なくともお互いに悪印象は持つていないよつに思えるが……まさか一人は恋人同士なのだろうか。

「何かお悩み中、かにゃ？」

探るようなナズナの声で空也の意識は現実に引き戻された。

テーブルに乗り上げたナズナのロープの襟元は重力に引かれ、隙間からは白い肌がのぞいている。空也の視線も重力に引かれ、ナズナ

の胸元に落ちそうになる。理性を総動員して本能に抵抗する。

「うん。正解。見るとすぐにわかるからね。別に見られて減るものでもないけど。好感度アップだよ」

ナズナはそつと胸元を押さえて微笑む。空也はそらつとほけるしかない。

「こやーこやー言つのやめたんだ」

「だつて、にゃーにゃー言つてると本氣にしないでしょ」

不覚にもドキつとさせられた。

「高感度アップつて……ギャルゲじゃないんだから」

ナズナの顔がまともに見られない。

「にやはは。誰も好感度の話なんてしてにゃいにゃ。おっぱいの話だにゃ。H口いにゃー」

ナズナは自分の胸を両腕で抱えるようにして持ち上げた。

「結構大きいから見られると恥ずかしいんだ」

空也の目は今度こそ間違いなくナズナの胸元に吸い寄せられた。してやつたりと言つようにナズナの目が細められた。

「口口口口態度変えられると反応に困るよ……」

「それが狙いだからね。微妙な女心をレクチャーしてあげているのだ。空也が女の子でいられるように」

そう言って、話は終わりとばかりに携帯ゲーム機のスイッチを入れた。空也はバスケットからカカオチョコレートを一つ摘まんで口の中に放り込んだ。

ビタースイート。

ナズナはゲーム画面を食い入るように見つめている。片手で操作を続けながら、ずり落ちてきたフードを直そうとしている。ところが上手くいかないらしく潔く脱ぎ捨てた。長い髪がはらつと落ちる。

「空也も好きなことしていいよ。ここにいる必要も無いし」

ナズナはゲーム画面から目を逸らさずにそんなことを言つた。

「あー……『めん。何気に酷いこと言つたかも』

ゲームを一時中断して、しかしあくまでスイッチは切らずに、椅子

を空也の隣に移動させた。肩と肩が触れ合いそうな距離だが、ナズナは気にしていないようだ。

「ロムが三種類あつて、内容は基本的に同じなんだけど……」

「空也にも見えるよつにと、わらに密着してくる。」

「ほら、図鑑が埋まつてなくて。一つだと絶対にコンプリートできないんだ。一人でやってもいいんだけど……その……」

ナズナはゲーム画面と空也の顔を交互に見ていく。空也はナズナの体温がこそばゆくて体を引いた。

「スノップならコンプリートしてるんじゃない？」

空也は気を紛らわせるために思つてもいなことを言つてしまつ。

「アイツ。なんだかんだでいいやつだしさ。頬んだら、一つ返事で交換してくれるつて」

「……ばか。もういい。しらけちゃつた。出でつてくれる？」

ナズナはふくれつ面をしてそっぽを向いた。

「え？ え？ え？ なんで怒つてるの？ 僕に頼むよりスノップに頼んだほうが早いって。やってなくてナズナのためなら……」

ナズナの姿が消えた。

空也はナズナの足跡を追跡しようとしたが、ブロックされていて追いかけられなかつた。

こうなつてしまつては、ナズナが許してくれるまで話すうりできない。

「お前……バカだろ」

どこからともなくスノップが現れて、バスケットの中からアーモンドチョコレートを取り出し放り投げた。小さなラグビーボールは綺麗な放物線を描いてスノップの口の中に消えた。

「なんだ。スノップいたのか」

「デジャブですか。甘いね。このチョコ。もつと甘くてもいい。チ

ヨ「は甘ければ甘いほどいい」

あつという間に三つ。次から次へとスノップの腹袋の中にチョコレートが吸い込まれていく。焼き菓子には一切手をつけない。ひたすらチョコだ。

「高級なんだぞ、これ。食わないの？」

残りが二つになつたところでスノップが聞いてきた。空也はため息まじりに首を振つた。見ているだけで胸焼けがしてきそうだ。

「あ、そう。じゃ、遠慮なく」

スノップはチョコレートを完食するとハンカチで指を拭い、テーブルに乗つていたティーカップを手に取つた。

ナズナのカップだ。

「ちょっと！ スノップ待て。それナズナのだから」

空也は慌てて制止する。

スノップは一瞬眉をひそめ、口をつける寸前だつたカップを見やる。空也がほつとしたのもつかの間、スノップはニヤリと口の端を上げると、構わずカップに残つた紅茶を飲み干した。

「あーっ！ あー。あー……」

「砂糖もミルクもレモンもなしのストレートか。苦いね。だがそれがいい」

ポットを手にして一杯目を注ぐ。砂糖とミルクをたっぷり入れてスプーンでかき混ぜる。

「昔はあいつも砂糖ドバドバ入れてたんだけどなあ。最近は太るの気にしてるみたいよ。ちょっとくらい太つても可愛いのにね。どーしたの？ 世界の終わりみたいな顔して。あ、もしかして狙つてた？ ナズナの残り。変態さんだなあ」

スノップは空也のカップにポットから紅茶を注ぐと、ぎゅーっとレモンを絞つた。

「疲労回復にはクエン酸が効くらしいよ。ビビビ」

疲労の原因たるスノップは全く悪びれない。悪びれないからこそその疲労の原因だ。空也は呪いの眼差しをスノップに送つた。

「おー。怖い怖い。そんな顔してにらんだつて無駄無駄。ナズナはお前なんかに渡さないよ。早いとこバレないかなあ」

「ほんの、口リコン！ 一回り以上も年が違つ相手をいかがわしい目で見やがつて。光源氏気取りか。おっさん！」

「お！　若いのによく知ってるね。光源氏計画は男の夢だねえ。ぬつふつふ。ナズナの初めての相手かあ。それもいいなあ」
スノックは夢見るような目をしてろくでもないことを語る。

他人の詳細な女性遍歴に興味はないが、年下の女の子を自分好みに育て上げる。それが光源氏計画であることくらいは空也でも知っている。

「ナズナに言いつけてやる」

「別にいいよー。ナズナとは親密な関係だから。間接キスくらい、どうつてことないさ。キスだつてしたことあるんだぜー。ナズナのファーストキスは俺のもんだもんね。過去は変えられない。ひひひつ。お前がどんなに頑張つたつたところで。ふははははは」

白衣をはためかせて高笑いするスノックは、どこからどう見てもマッドサイエンティストのいでたちだ。美少女の敵は世界の敵のはず。しかし、ヒーローはおろか死神すらもスノックを倒しに現れてはくれない。おそらく春の長期休暇中なのだ。桜の下で宴会をしているのかもしれない。

だから仕方なく空也が代行することになる。

「デタラメ言うな。ナズナに聞けばすぐにわかるんだよ。アホか」「デタラメだつて言い切れるかな？　俺が嘘をついたことがあるか？　よく考えてみろよ。こんな吹けば飛ぶよつた嘘をつく理由を。あるか？　うん？」

スノックは自信たっぷりに笑っている。

紅茶に溶け込んだレモンの果汁のように、スノックの嘘が空也の心に侵食していく。

はたして本当に嘘なのだろうか。

ナズナに対する信頼が揺らぐ。そんな自分が嫌で、空也は必死に心に浮き上がった疑念を打ち消そうとする。しかし、いつたん浮かび上がった毒は心の隅々まで拡散していくばかりで、簡単には消えてくれない。

「カードゲームでもするか」

急に調子を変えてスノップが言った。

手にはカードの束が握られている。空也の返事を待たずにカードをテーブルの上に並べていく。山が七つできた。それらを一つにまとめて、さらに同じ動作を繰り返す。ディールシャッフルだ。

「ただやるのも面白くないな。何か賭けるか。何が良いかな……」

「おい。誰もまだやるとは言つてないだろ。勝手に話を進めるなよ」

「いいや。お前はやるね。何故なら賭けるものは真実だからだ。お前が今一番欲しいものだろ？ ほれ。デッキだしな」

スノップはシャッフルをヒンズーシャッフルに変えて、デッキを両手で何度も切り直している。空也が渋つていると、スノップはますます調子に乗つた。

「負ける勝負はしたくないか？ 懸命だねえ。真実は闇の中へ。俺の真実じやないぞ。お前の真実だ。逃げた、という真実は闇に葬つてやるよ。ナズナには知られたくないもんな。お情けで黙つっていてやう」

「うつぜーな。安い挑発にあえて乗つてやるみ」

空也はデッキを取り出した。スノップ以上に素早くシャッフルする。

「やる気まんまだねえ。よしよし」

スノップはダイスを二つ中空に放り投げた。

ダイスの目は六と三を示している。スノックが三を示したダイスを指で弾いた。ダイスは綺麗に一回転して四の目を示した。

「ぬつ ふつ ふ。 完勝完勝」

ダイスは初めに先攻後攻を決めた後 一戦目以降は敗者に先攻後攻の選択権が与えられる は勝敗を表すのに利用されていた。最終戦績は六と四。

「空也君。見たまえよ。そして言いたまえ。勝敗を」

スノックは汚かつた。ひたすら汚かつた。

スノックのデッキは通称近代美術館と呼ばれる一人回し専用のコンボデッキだった。

一枚数万円もする希少価値の高いカードがふんだんに盛り込まれ、脅威の一ターンキル率八十パーセント越えを叩き出す。そのあまりの極悪さに、デッキのキーカードが何枚も禁止カードリストに記載されているといういわくつきの代物だ。

だが、それはあくまで公式大会においての話。

私闘にルールは無用とばかりに、スノックは財力に任せて蹂躪の限りを尽くした。

空也の代わりにアンティークドールのローズマリーちゃん 推定五百才、お値段はスノックの札束、デッキとほぼ等価。スノックの数あるドルコレクションのひとつ が座っていたとしても勝敗には微塵も影響しなかつたと思われる。

「……ジウゼロです」

悔しさに声が震える。

「あーん？ 聞こえませんなあ。もっと大きな声で言つてもらいませんと。あー、目も悪くなつて良く見えん。で、何対何でしたつけ？ 十回もしたからなあ。さすがに覚えてないなあ」

スノックはわざとらしく耳に手をあて、目をぱちぱちと瞬かせてい

る。

勝負の結果よりも、スノップの策略にはめられたことのほうが何倍も悔しかった。だが、結果は結果として認めなければならない。

「十対ゼロでスノップさんの勝ちです」

「おけおけ。お互いの健闘を称えあおう。グッドゲーム」
空也が宣言すると、スノップは凄く良い笑顔で右手を差し出していた。

勝負の結果は認められても、スノップの存在まで認められるかというと、それは全く別の話だった。にやにや笑いを浮かべているスノップの存在はどちらかといふと、消去してやりたい、とクーヤは思つた。

「おーっと、姑息な手段に出るつもりかな？ リムーブしてプロックすれば俺の顔は見なくてすむだろ。しかし、その瞬間、俺の記憶には負け犬の姿が記録されるのだ」

クーヤは諦めてスノップの手を取つた。せめてもの報復としてその手を力の限り握りつぶした。と、手の中に何か硬いものが隠されていた。ちょうど手のひらに納まるサイズ。それを握らされた。空也は訝しく思いながら手を開いた。

ゲームの口ムだつた。

「これは？」

「鈍いなあ。忘れたのか？ 賭けただろ。真実。それが真実だよ」

「でも、俺は負けたのに……」

勝者から敗者に譲渡されるのは屈辱であるはず。それが賭けといつものだ。スノップの意図がつかめない。

「ナズナがやつてたゲーム。お前の言ったとおりだよ。俺はコンプリートしてるし、協力を惜しむつもりもない。だけどな……これ以上言わせんなよ。ま、やってみな。面白いから」

スノップはそれだけ言つと、ヒラヒラと手を振りながら立ち去つた。屈辱。

ゲームに負けただけではなく、敵に塩まで送られてしまった。

さつさと仲直りしる。

そう言われた気がした。

「くそつ。なんて嫌なやつなんだ」

空也はゲーム機に口ムを乱暴に突つ込んだ。

冒険の始まりを予感させる明るいメロディーが流れ出した。

ユグドラシルは今日も変わらず回り続けている。

共有する認識が共通する世界を形作る。

現在では常識となつた感覚だ。

しかし、断片化直後の世界ではパラダイムシフトを受け入れられた人間とそうでない人間がいて……結果、世界は断絶してしまつた。もしくは現在でも断絶は続いている。

断絶といつ葉はいつしか断片化と姿を変えた。旧世界を思い起されるというのが主たる理由だ。一方で現実の本質は何も変わらないままだ。

民族、宗教、言語、文化、価値観……「ミコニティーを隔てる境界

は様々であり、それは曖昧でもあり明確でもある。

世界には無数の扉が閉じられており、一人の人間が両手に持てる鍵の数には限りがある。

開けられない扉の先に存在する世界は存在していないも同じ。食べられない葡萄を酸っぱいと断じた狐のような思考回路だ。しかし、それで満足してしまつ人間がいることも事実だった。

共有キーを創造する試み。

もしくはマスターキーを流通させるたくらみ。

そうして作り上げられたのが……

ジニアの日誌より

ドクター、

指の間でくるくると回るシャープペンシル。

眠気を紛らわせるために始めたはずだった。しかし、円弧を描くペ

ン先からは睡魔が忍び寄つてくる。

数学教師のテノールボイスはクーヤを夢の世界の入り口へと案内する。

視界が白濁してきた。いよいよダメだな、とクーヤは思つ。指の隙間からシャープペンシルが脱出して、机の上を走り回つている。からうじて転落は免れたようだ。

「クーヤさん。この問題に答えてください」

「ほえ？」

夢の世界から強制的に引き戻される。

数学教師が怖い顔をして黒板の問題を指し示していた。

「は、ハイ！」

声が微妙に裏返つていて恥ずかしい。

元気良く返事をして立ち上がったものの、黒板には問題文が四つ書かれてあって、どれに答えたらいのかわからない。

おそらく正解は一つだ。

数学教師はクーヤが授業中に居眠りしていることに気がついて、この難題をしかけてきたに違ひなかつた。立たされているのはクーヤ一人だけだ。それがいかにも怪しい。左端の問題に答えればいいのだろうか。しかし、ダミーの可能性もある。

「早く答えなさい。わからないのですか？」

数学教師は定規で測つたような絶妙な角度で黒板を指して問題を特定させない。

クーヤは助けを求めるように周囲に視線を走らせた。誰も目を合わせようとしない。みながうつむいている。

しかし窮地に立たされた空也の視線を真つ直ぐに受け止めてくれる人間がただ一人。

唯だ。

ただし、それはクーヤを助けるためではなかった。彼女は爆睡中だった。肘をついて細い両腕で頭を支えているが、両目は完全に塞がれていた。全く頼りにならない幼なじみだった。

「あのー、えー」

曖昧に言葉を濁しながら言い訳を考えるが、教師の眼光はいよいよ鋭くなってきた。とても目を合わせられない。クーヤは下を向いた。ノートは白い。答えはあらか問題文すら書き写されていない。当然だ。クーヤは今まで授業を聞いていなかつた。ところが、右下でアンサー＆ダウンロードの文字が点滅している。

差出人はアリサ。

知らない名前だが……クーヤは藁をもつかむ気持ちで指を当てた。一瞬でノートに数式がずらりと並ぶ。

どうやら答えて間違いなさそうだつた。それも全問の解答。クーヤは急いでコピーして送信。ノート上で起こつたことがそのまま黒板上で再現された。

教師は黒板に現れた答えをしばらく吟味していたが、やがて「正解です。座つてよろしい」と言った。

席についたクーヤはほつと胸を撫で下ろした。冷や汗をかかされたが、あまり注目を集めずにするんだ。目立つよつなことはできるだけ避けたい。

落ち着いてくると、送信元が気になり始めた。クラスの中でクーヤのアドレスを知っているのは唯だけのはずだ。そう考えれば、目を合わせようとしなかつたクラスメートたちのことを一方的には責められない。スノップとナズナには教えてあるが、当然ながらここにはいない。

授業を聞き流しながら、クーヤは机の下でこつそりクラス名簿を呼び出した。

ユイと自分の名前しか記入されていない。クラスメートを避けるようにして学校生活を送っているクーヤにはいまだ唯以外の友達がい

なかつた。もし唯がいなかつたら、昼休みは花のぼっち飯になつていたかもしれない。美少女が一人ぼっちで食事している風景は絵になつたとしても、本人は面白くないだろうとクーヤは思う。

アリサ。

名前からして女子だろうか。しかし、クーヤ自身の例もある。名前が女っぽいからといって、女だとは限らない。もしかすると唯の友達かもしれない。唯は自分以外のクラスメートともそれなりにつきあいがあるようと思える。唯にメールを送信する。返事は来ない。というか、お休みタイムが続行中。気づいてすらもらえない。

お礼くらいはしておこう。

クーヤは「ありがとうございます。おかげで助かりました」と、アリサにメールを送つた。

昼休み。

クーヤは唯と二人でお弁当を広げている。

メールは送ったはずだが、唯からも返事は無かつた。

クーヤは唯にアリサのことを聞いてみることにした。

「アリサって人のこと知ってる?」

「うん。知ってるよ。有名人だもん」

唯は事も無げに言う。知っているならメールを返してくれてもいいじゃないか、とクーヤは思った。

「窓際の列の一番前の席に座っている人」

唯に言われて窓際を見ると、男子が一人。自然体に見えるようにさっぱりと切り揃えられた髪。すっと通った鼻筋。涼しげな目をしている。片手で文庫本を開いて読みふけっていた。男のクーヤから見ても文句なしの美少年だった。いかにも優等生っぽい。

「ガン見しない。気づかれるよ。かつこいいから見たいのはわかる」

クーヤの顔を唯の手が押し戻した。

「クーヤは知らないだろうけど、女子の間では相互不可侵条約が結ばれてるの。自分から半径一メートル以内に入つたら、蜂の巣にされるよ。あんまり見ると色目使つたとか、なんとか言われるから」

「もしかして、文武両道だつたりして」

「よくわかつたね。そうなの。だから凄い人気。でも、そうか。クーヤも女の子だったんだ。全然男の子の話しないから興味ないのかと思った」

唯は全然見当違いのことを言つてゐるが、あえてクーヤは乗つてみることにした。

「そ、そんなんじゃないって。もう、やだなあ。たださつきの時間助けてもらつたから。それだけ」

「さつきの時間? 何かあつた?」

がつぶり食いついてきた唯にクーヤは軽く説明した。

「へー。そんなことが。いいなあ」

「何が良かったの？」

夢見るよに呟いた唯の声に答えたのはクーヤではない。声はクーヤの後ろからした。

振り向くと、アリサその人が立っていた。

「お昼一緒にしても？」

二人が答える前にアリサは近くの席の女子に頼んで、席を貸してもらっていた。断られるとは露ほども思っていないらしい。自然過ぎて少し嫌味だ。

「ええ。どうぞ。ちよつと話をしていたんですよ。先ほどはありがとうございました」

爽やか過ぎるアリサに負けないくらい魅力的な笑顔でクーヤは彼を迎え撃つことにした。同性だからわかる。にいつは男の敵で、引いては女の敵だ。

「なんか困ってるみたいだつたから。余計なことかもしれないって思つたけど、放つておけなくて」

「寝てるやつが悪いんで」

自分のことは棚に上げて、唯が横から茶々を入れる。

「自分だつて寝てたくせに。どの口が言つか」

「わざわざ寝てる人を当てなくともいいのにね。気がついて良かつたよ」

爽やかな笑顔を崩さないアリサを見ていると、クーヤは鳥肌が立ちそうになってきた。笑顔が引きつりそうになる。何が悲しくて男相手に愛嬌を振りまかなければならぬのか。美少女の道はかくも厳しいものなのか。

「どうしたの？」黙り込んだ。いつもはもつとしゃべるのに「唯は唯でキラーパスをガンガン蹴り込んでくる。ショートして見事ゴールを決めて見せろということなのだろうか。それはつまり、アリサを籠絡する。考えただけで気持ち悪くなってきた。

「ところで、アリサって女の子みたいな名前ですよね。由来とかあつたりするんですか？」

内心はどうあれ、あくまで笑顔を保つたままでクーヤは質問を投げかけた。

「ああ、うん。好きな花の名前から取ったんだ。花言葉は……あごめん。興味ないよね」

「そんなことないです」

クーヤは感心していた。実際クーヤは全く話題に興味が持てなかつたからだ。だが、目の前の女の本性まではさすがのアリサでも抜けないらしい。クーヤが微笑みかけると、照れたような顔をする。

「私も好きですよ。プレゼントに花束って定番ですけど、もらえたら嬉しいだろうなって」

「あー。わかる、わかる」

「そうかな」

女子一人から同意を得られたアリサは嬉しそうだ。

「そうだ。花束をプレゼントするのは無理だけど、変わりにこれなんてどうかな？」

アリサは中空から何かを取り出して、机の上に置いた。

クーヤは口から心臓が飛び出しそうだった。

それはクーヤの睡眠不足の原因で、スノットブから押し付けられた屈辱で、ナズナを怒らせるきっかけにもなった、あのゲームロムだつたからだ。

「何だろ。何だかいわくつきの品みたい。古物うだけど……」

何も知るはずがない唯が手にとつてしげしげと眺めている。

「いわくなんてあるはずないよ。おかしなこと言わないで。ただのゲームロムだつて」

「そうそう。それにしても良くわかったね。何十年も前の骨董品だよ、それ」

アリサの感心した口ぶりにクーヤは目が泳ぎそうになつた。対照的に唯の瞳には疑惑の炎がいまにも灯りそうだ。

「実は持つてたりして。すごい偶然ですね」

下手に隠していると、余計泥沼にはまりそうだ。クーヤは観念してゲームロムを取り出した。

「え！？ どうして！？」

アリサが声を上げた。あまりにも大きな声だったので、一瞬クラス中の視線が集まつた。唯も目を丸くしている。

「ごめんごめん。なんでもないから」

アリサは照れ笑いを浮かべながら、誰とはなしに弁解した。それで、あからさまな視線は散つた。しかし、いつたん集めてしまつた興味までは逸らせなかつたらしい。真綿に包まれているような居心地の悪さが残つた。

「あやしいんだ。まあ良いけど。いろいろことに巻き込まれたくな
いし」

唯は手の中で弄んでいたゲームロムをアリサに返した。

「なんかごめんね。嬉しくてつい。また一緒にお昼してもいいかな
？」

「ええ。喜んで」

逃げるようにしてアリサは席を離れた。

笑顔で見送りながらクーヤは内心ほつとしていた。糸がほつれるよ
うにぼろが出てもおかしくはなかつた。逃げ出したいのはクーヤも
同じだつた。

そして、クーヤは心の中でアリサを第一級危険人物に指定した。

その日の夜のこと。

空也がいつものように回転するゴグドラシルを観察していると、唐
突に景色が暗転した。

「だーれだ」

「ナズナ？」

半信半疑で尋ねる。声からするとナズナだろうと思うが、機嫌が良
すぎるのがおかしい。空也はナズナにブロックされてから、特に何

もアクションを起こした覚えがない。楽しそうに後ろから田隠しをされるような理由は何も思い当たらなかつた。

「そ�でーす。ナズナでーす」

ナズナは踊るようにして空也の前に回りこんできた。空也はナズナの姿に目を奪われた。ナズナがありえない格好をしていたからだ。いや、ありえない、ということはないのかもしない。なぜなら、それは空也が毎日身につけている服だから。しかし、いまここでこのとき、ナズナが着ているとなると……やはり違和感が先にたつてしまつ。

「反応薄いなあ。初お披露目なのに」

ナズナはすねたように言つが、あくまで楽しそうだ。ナズナが着ているのはクーヤが毎日着ている女子制服だつた。飽きるほど目にしているのだから見間違ははずがない。

「ナズナ。同じ学校だつた？」

「はあ？ 何言つてるの？ 意味わからんないよ」

「だつて、その制服」

「今日は制服プレイの日なのです。ほらほら、空也も着替えて着替えて。あ。空也は男子と女子。どつちがいい？ 一応両方用意した」微妙に会話が噛み合つていない。もしかすると、ナズナは意図的にずらしているのかもしれない。だが、空也は流されてしまう。花のように微笑むナズナは犯罪的に可愛いのだった。ナズナの機嫌が直つたなら、それでいいか、と駄目な思考に陥つてしまつた。

ナズナの右腕には男子制服、左腕には女子制服がかけられてある。空也は男子制服を受け取り、瞬時に着替えた。

「せつかくだから女の子の姿、見せてくれた良かつたのに」

「やだよ。恥ずかしい」

「そんなことないと思うけどな」

ナズナは空を見上げて思わずぶりに咳いた。

不思議な女の子だった。女の子らしいかどうかと言えば、それでもないような気がする。それでも、美少女を演じている自分よりは、

格段に女の子らしい気がする。ナズナを見ていると、空也は自信を喪失しそうになる。

「まあいいや。座つて座つて。ガールズトークもしてみたいけど、いまはそれよりも

ナズナは地面に腰を下ろして、携帯ゲーム機を取り出した。

「空也もやつてるんでしょ。交換しよ

ここにきて空也はようやく理解が追いついた。おせっかいなスノップがナズナに報せたのだろう。手際の良さに舌を巻く。少し悔しいが、素直に感謝しておくことにした。

「スノップによろしく言つておいてくれる？ ありがとうって

「んー、なんのことかわからぬから自分で言いなよ。そんなことより交換」

ナズナは腕を伸ばしてゲーム機を振つてみせた。空也もゲーム機を手にナズナの正面に座つた。通信を開始しようとすると、うまくいかない。空也が首を傾げていると、ナズナが笑いながら首を振つた。

「無線通信できないの。骨董品だからね。それでコレの出番つてわけ

ナズナはケーブルを手にして、「ネクタを自分のゲーム機に差し込んだ。反対側を空也に向けて差し出す。

短い。

膝を突き合わせていては届かない。空也は迷う。ナズナの隣に行けばケーブルは届くだろう。交換のため、それ以外には何もない。と、必死に自分に言い聞かせて顔を上げた。

ナズナと目が合つた。ナズナは何も言わずに目を逸らした。

空也のなけなしの勇気は早くも砕け散りそうだった。交換のため、交換のため、と念仏のように何度も心の中で唱えて、邪念を振り払おうとする。

空也はなるべくナズナから離れて、しかしケーブルがぎりぎり届く位置に座つた。ケーブルはピンと張つている。

「そんなに離れてたら痛む

ナズナはそう言つて半分だけ体を寄せた。たわむケーブルに合わせて、自分の緊張も緩まれば楽になれるのに、と空也は思つた。

「私もドキドキしてるんだ。初めてだから」

ナズナが交換のことを言つてているのはわかつても、肩が触れあい、耳元で囁くように言わると、全く別なことのように聞こえてしまつ。

「空也はコレ出して。私があげるのはコレでいい？」

画面に映し出されたファンシーな生き物をナズナの指がなぞる。空也のほうには海老を模した鍵型の生物が、ナズナのほうには蟹を模した錠型の生物がそれぞれ映つてゐる。どうやらペアになつてゐらししい。

空也は一も一もなく首を縦に振つた。

画面が切り替わり、ケーブルの中を固体情報が移動する。ナズナは鼻歌混じりに見送つてゐる。交換終了を告げる音楽が鳴つた。

「成功。またしょうね。今度は対戦とかもいいかも」

ナズナの笑顔が眩しくてとても直視できない。

「ああ。うん。そうだね」

「ええー。なんだか私だけ盛り上がつてたみたい。感動薄いよ。そんなん空也に問題です。97プラス84150115319はいくつでしょうか？」

「は？ もう一回言つてくれる？」

「だから、97プラス84150115319」

ナズナはそう言つて、空也のゲームディスプレイを指してゐる。97は交換した生物の図鑑番号、84150115319はナズナのゲームIDだつた。

「841501154……16？」

「ふー。はずれ。正解は9784150115319、でした」

「足してないじゃん」

「うん。まあそなうなんだけどね。でも一人だけの記念の数字だから。覚えててね」

ナズナが言つと、ただの数字の羅列が特別な意味を持つように思えてくるから不思議だ。しかし、十三桁もの数字はいくらなんでも覚えられそうに無い。空也がそう云えようと口を開きかけたその時だつた。

けたたましく鳴り響くアラーム音が一人の間に割り込んできた。何の前触れもなくうるさく騒ぎ始めたアラームに驚かされて、空也は反射的にコグドラシルに目を走らせた。傾きながら不安定に回転しているが、全然倒れそうには見えない。至つて平常運転。日常を続いている。

コグドラシルに異変が無いとわかり、空也の気持ちに余裕が生まれた。注意して耳をすませてみると、じつやらアラームは近くで鳴つているようだつた。

「イントルーダーアラーム、だよ」

澄まし顔をして聞きなれない単語を話すナズナに動搖の色は見られない。ケーブルを無造作にブチッと抜いて片付けを始めている。

「イントルーダーアラーム？」

空也はおうむ返しで問いかけた。

「そう。日本語で言つと、侵入警報。新しく誰か来たら鳴るよう設定してあるの。空也の時の失敗を教訓に」

話しながらも、ナズナはきぱきと片付けを続いている。もはや一人で仲良くゲームに興じていた痕跡は空也の手に残った携帯ゲーム機だけになってしまった。

「しまつて。早く」

あまり強くはないが有無を言わせぬナズナの口調に空也は正直とまどつていた。しかし逆らつ理由も特に無いので、言われるままに従うこととした。

アラーム音が鳴り止んだ。

空間に無数のテクスチャが浮かび上がり、張り付くよじにして人型を形成していく。針金色でテコボコの外觀が緩やかに姿を変えていく。

高速で自己認識と他者認識が交錯し、世界の共通認識となつて存在が承認される瞬間だ。

「あれ？ 空也じゃない。何してるの？ こんなところで」
侵入者はきょとんとした顔をしてくる。

「お前こそ、なんでここに？」

空也も驚きを隠せない。

ナズナはそんな二人の顔を交互に見比べている。

「知り合い……だよね？」

おずおずと切り出したナズナに空也は黙つてうなずいた。

侵入者は唯だつた。

空也の幼なじみで、クーヤのクラスメート。

この場において欲しくないランキンギ、ナンバーワン。

唯は現時点で空也に一番近く、さらにクーヤにも一番近しい人間だ。それは疑いようのない事実であり、とどのつまり、空也とクーヤの秘密に感づく人間がいるとすれば、それは唯をさしあいては考えられない。

さらに間の悪いことに、空也とナズナはおそろいの制服を着ている。唯にとつてもおなじみの学制服だ。

場を支配している氣まずい沈黙。しかし、下手に口を開けばますます疑念が強まりそうだ。ナズナもそれを肌で感じているのか、いつの間に軽口は叩かずに、空也の出方をうかがっている。

「えーと、私はクラスの友達に借りた本の続きが気になつて。リンクを辿つてきたら、ここに。あ、友達つて言つても女の子だよ。ちょっと変わつた子なんだけど、綺麗な子でね。あの、あのね。私は説明したから。はい、空也も説明！」

沈黙に耐えかねて走り出した唯から、暴投ぎみにバトンが渡された。「こ、こちらはナズナさんです。先月、ここで偶然会つて。それから仲良くしてもらつてます。この制服を用意したのもナズナさんです。ナズナさんはコスプレ好きで、こんな格好をしているのはナズナさんの趣味です。全て偶然です。はい、ナズナさん。どうぞ！」バトンを落とさないことに必死で、支離滅裂なうえに丁寧語でまくしたてるように話してしまつた。唯が暴投ぎみなら、空也は危険球の類だ。体にぶつけるように、バトンを投げつけた自覚があつた。

「紹介にあずかりましたナズナです。90s nostalgic aへようこそ。この区画の水先案内人のような役目をやらせていました。言つても、勝手に名乗つていいだけですけど。よ

ろしくお願ひします。唯さん」

ナズナは笑顔で軽く会釈をして右手を差し出した。見事としか言いよつのない軌道修正。暴投だろ？と危険球だろ？と、ナズナに処理できないバトンは無いらしい。流れるように戻ってきたバトンを無む碍にはできず、唯は握手に応じた。

「一つだけ訂正させていただきくと、コスプレは空也が好きだからしてるんです。人のせいにするなんて、空也つてばお茶目さんですよね」

ナズナはこっやかに笑いながら、平氣で穏やかでないことを言ひつ。

「……空也、空也って。呼び捨てなんだ」

「唯さんも空也って呼んでるじゃないですか」

笑顔プラス丁寧口調でありながら、ビートなく棘がある言い方をするナズナ。

空也が「らしくないな」と思つていると、肘でわき腹をつかれた。とにかく話をあわせると言いたいらしい。

「その……ナズナはナズナでいいって言ひし、自分だけ空也さんって呼ばれるのは、なんというか……」

二人の間に立たされた空也は田に見えない圧力で押しつぶされそうだった。

どこかやりきれない顔をしている唯とは対照的に、ナズナは状況を心から楽しんでいるような気がしてならない。

「うう。だつて空也と私は子供のころから一緒で、空也のことを空也つて呼ぶ女の子は私だけだつたんだよ」

「唯さんが知らなかつただけかもしだせんよ？ 現にいま、ここで、私と空也は名前で呼び合つてゐるじゃないですか」

ナズナは傲然じやがんと胸をそらし、小悪魔のように悪戯っぽく笑う。

ナズナのおかげで当面の危機は乗り切れたような気がするが、新たに別の問題が持ち上がつてゐる。なんなくそれは空也にもわかる。なぜなら唯がふるふると肩を震わせているから。そして唯は爆発した。

「そんなことない！ 空也はそんなことしない！ 空也も何か言ってよ。私、この人嫌い。絶望的に気が合わない。砂糖を入れた玉子焼きが甘くなるつていうことよりも直感的にわかりやすい。水と油は混じらないの。」 うううう女は下手に出てたらつけ上がるの。絶対お友達になりたくないタイプ」

思いつく限りの悪罵をひと通り叩きつけて、ハアハアと鼻息も荒く、悪鬼の」とき形相でナズナをにらみつける。十年来の付き合いの空也ですら、裸足で逃げ出しちゃうるといふのに、ナズナは嫣然と微笑んでいる。そればかりか、空也の腕をとつて隣に寄り添い、自分の腕を絡めた。けつしてわざやかではない感触に空也の鼓動は跳ね上がった。

「私たち仲良しですものねー」

拒否することも、逃げ出すこともできず、空也はうなずいた。

押しつけられた柔らかな膨らみの破壊力を目の当たりにして空也の精神は崩壊寸前だった。クーヤに変身しているときに意識しないようにするだけでも、健全な男子高校生としては多大な精神力を要する。そんな空也がナチュラル美少女のそれを意識しないでいられるはずが無かつた。

「私だつて空也と仲良しだもん。はーなーれーるー」

空いてあるほうの腕を取つて、一人を引き離そうとする時は涙目になつてゐる。まるで子供のようだつた。とても哀れで口にするのは憚られるが、ナズナと比べると非常にはつきりと感じられた。

「かーつ！ 傍観者を貫こうとしてたが、もう見てられん。公共の場でいちゃついてんじゃねーーー！」

苦虫を噛み潰したような顔をした男が怒りの咆哮とともに現れた。空也は体を硬くした。ナズナと唯も同じような姿勢のまま固まつている。

「両手に華で脳内までお花畠か？ 色ボケが！ 」 これはお前の私有地じゃねーんだよ。若いからつて、何でも許されると思つたら大間違いだ！ 見えんところでやれ。見えんところで」

ビシッと黒スーツと白衣を着こなした無精ひげの男。その名はスノップ。

この場について欲しくないランキング、貫禄の殿堂入りは伊達ではない。

「これだけ言つても離れるつもりはナシか？ ん？」

片眉を跳ね上げて舐めるようにナズナを見つめるさまは、まるで時代劇に登場する悪代官のようだ。

ナズナはぱつと空也から離れると、

「べ、別にちょっとからかつただけだから。ちんまい子犬がいてうるさかったから」

スノップに対して弁解じみた言い訳をした。

「あの二人つて、どういう関係なの？」

狼狽するナズナを見て冷静を取り戻した唯が空也の腕を放して小声で言つた。

それは空也も以前から気になつてゐることだった。

ナズナに尋ねてみても、いつもばつが悪そにはぐらかされてしまうし、スノップに至つては端から真面目に答える気がなさそうなのだつた。

今だつてお互に悪態をぶつけ合つてゐるが、二人とも全然嫌そうには見えない。険悪な雰囲気は微塵も感じ取れないし、どちらかといふと仲が良さそうに見える。

それはまるでディスプレイ越しに眺める映像。臨場感は紛れもなく本物だが、決して立ち入ることのできない壁が存在しているようだつた。

「さあ？」

空也は他人事のように曖昧な返事をするしかなかつた。

「そつなんだ」

唯の声はどこか安心したような響きを持つていた。

ナズナとスノップは一人で何かやりとりをしているようだが、しばらく前から空也には一人の声が聞こえなくなつていて。どうやら一

人だけでダイレクトメッセージを交換し合っているらしい。

ナズナはたまに顔を赤らめて空也のほうをちらちらとうかがつている。身振り手振りが良く見えるだけに、嫌な想像が鎌首をもたげてくる。空也とナズナの会話はスノップに筒抜けだが、スノップはナズナと秘密の会話を交わしている。

二人きりのプライベートな会話が漏れることは基本的にはありえない。第三者が知っているとすれば、それはどちらかがログの公開を了承した場合に限られる。空也はナズナとの会話をスノップに知られたくない。だから、必然的にナズナから……つまりナズナはそれだけスノップに気を許しているということだった。

「ねえ？ 二人で抜け出さない？」

唯の声がした。唯はナズナとスノップの方を見つめたまま表情にも変化はない。

秘密の会話だつた。

ナズナはスノップと二人だけの世界に没入してしまっている。

だから、たぶん気づかれる事はない。自分がいなくなつたところでナズナは気にも留めない。自虐的な思いに空也は囚われていた。「エスペーマミーって漫画なんだけど……その、続きが気になつて。アレクサンドリア図書館の場所わかる？」

「わかるけど……」

空也は迷つていた。ナズナはスノップとの会話を切り上げるつもりはなさそうだが、それでも空也はこの場に留まりたいと考えてしまうのだった。

「いいじゃん。二人は一人で仲良くやるつて。そんなつらそうな顔してるの、これ以上見たくない」

唯は空也の手を取つて歩き始めた。後ろ髪を引かれる思いはしたが、離れていく空也を止める声はかかるない。ナズナと一瞬目が合つたから、気づいていないはずは無いと思う。

「そんな引っ張るなよ。わかつたから」

空也はいらだちを隠せない。唯の手を振り払つてしまつ。これでは

ハつ当たりだ。自己嫌悪に陥る。だが、唯は驚いた様子も見せずに微笑んでいる。

「……悪い」

「ん。何のこと? 案内してくれるんだよね? 違うの?」
勘の良い幼なじみのことだ。きっと半分くらいは空也の気持ちに気がついている。その上でとぼけたふりをしてくれている。空也は唯の手を取り直した。

「そうだよ」

悪戯っぽく笑い走り始める。急に引っ張られた唯は声をあげた。

「何だよー。変だよー。待つて! 待つてってばっ!」

視界から消えるまで結局一度たりとも引き止められることはなかつた。けれども、空也は気にしないことに決めた。

お人よしな幼なじみの期待に応えることがいまの空也にできぬ」とで、やるべきことだった。

「おーっ！ 青春、青春！」

空也と唯が消えた先をスノットブは手をかざして見送った。

「感じわる」

ナズナは地面をつま先で蹴った。砂ぼこりが舞い上がる。傍目からでもへそを曲げているのは明らかだろうが、スノットブに対して隠すこともないと思う。

「行きたいんなら行きなよ。いつも言ってるだろ？ ナズナの好きにしていいって。自分から残るつて言つたくせに」「スノットブはへらへらとしまりの無い顔をして笑つている。空也も空也だ。止めなかつたからといって、黙つて行くのは無い。行つて欲しくなかつたから、田で合図を送つていたのだ。それくらい察して欲しい。」

「まさか本気で好きなの？ やめときなつて。ありや、ろくでもないガキだぜ。ギブ＆テイク。空也には夢を見させてあげて、僕らは夢を叶える。そういう話。ミイラになつた美人局なんてお笑い草にもなりやしないよ？」

「ミイラ取りがミイラになるつて言いたいの？ 感じわる」

空也のことよりも自分には優先すべき目的がある。最初から仲良くなるつもりは無かつた。あくまでビジネスライクな関係を貫き通すつもりだ。頭ではわかっている。それなのに、何故かいらいらがつる自分の心が、ナズナには全く理解不能だった。

「にらむなつて。折角美人なんだしさ」

背後に回つたスノットブの腕が肩越しに伸びてきて、ナズナの体を優しく抱きすくめた。少しだけくたびれた男の人の匂いがする。嗅ぎ慣れた匂いだった。

「ねえ。やたら引つづくのやめてくれない？ 私、もう子供じゃないよ？」

「わかつてゐる。わかつてゐる」

口ではそつと言つたが、スノックは離れるつもりはないようだ。ぎりぎり

らとした無精ひげが頬に刺さりチクチクとむずがゆい。

「もう。わかつてないでしょ」

「わかつてゐるよ。いい匂いがするし、女らしくなつてゐる」

「うわっ。セクハラ。おつさん化激しいよ、最近」

スノックは苦い顔をした。太りやすくなつたと嘆いていたのを思い出した。少し傷つてしまつたようだ。

物心がつく前から溺愛されてきたから知つてゐる。スノックはナズナが本気で嫌がることは絶対にしない。三つ子の魂百まで、とはよく言つたもので、いまさら嫌いになんてなれなかつた。

「お兄ちゃんと結婚するー、て懷いてくれてた時が懐かしい。悲しいよ、おじさんは」

よよよとしなを作つて泣き真似をするスノックは、やはり鬱陶しいかもしないとナズナは思い直した。

「いつの話よ、それ。時効よ、時効。いつまでも引きずつてんな」

ナズナがスノックの腕を振り解いて抜け出すると、スノックは微妙に寂しそうな表情を浮かべた。一回りも年が離れているのに、そうとは思えないほどたまに幼い顔を見せる。ナズナはなんだか楽しくなつてきて、スノックの胸に飛び込んだ。

「もう少しだけ、スノックだけのお姫様でいてあげるからね」

腰の後ろに手を回し微笑みかけると、スノックは決まりが悪そうに頭をかいた。

「そんなこと言わずにずっと側にいてくれよ。あれはやめとけ。あの場面で女と一人で行つちまつよくなつにナズナは任せられんよ。わりとマジで」

「だからなんでそこで空せが出てくるのよ。怒るよ。わりとマジで」ナズナがジトッとこちらと、スノックは笑いながらナズナの頭をぽんぽんと撫でた。丸きり子ども扱いされているが、ナズナは気持ちよく甘えさせてもらつことにした。

「それにしても……ナズナ、もしかして少し太った?」

「太つてないよ。なんで?」

「あー……太つてないのか。そつか。おかしなこと言つた。忘れて

くれ」

スノックは目を逸らしてなんとなく調子が悪そうな感じだ。

「何か隠してるでしょ? 隠し事は無しにして」

ナズナは笑いながらスノックの体を引き寄せて逃げられないようにする。

「ちょ。ばか。ナズナ。そんなにしたら」

「何焦つてるの? うりうりー」

慌てふためくスノックの反応が予想外に面白くて、ナズナは体を摺り寄せた。その結果、ナズナは気づかされてしまった。スノックが隠していた秘密に。正直後悔した。言葉が見つからない。顔が火照つてくる。

「だから言つたのに。引っ付きすぎだ、ばか。ナズナのことはそういう目で見てないつもりだけど、俺も男だからな」

「うー、ごめん。私そんなつもりじゃ。でも、そんな。これって。そういうことなの? そんな。だつて私だよ。お風呂だつて一緒に入つたことあるし。これつて私のせい? 平気! 平気だから! 悪いのは私だし」

「あー。もういいから。とりあえず離れて。ずっとこのままだとツライ」

スノックにたしなめられて、ナズナは少しだけ我を取り戻した。スノックの言つとおりだ。恥ずかしいのはむしろスノックのほうだ。スノックから距離を取つて深呼吸する。

注目してはいけないと思つていてもありありと主張するその存在感はとても無視できない。視線が誘導される。男の人は興奮するとそうなるとは知つていたけれど……スノックに何と言つて声をかければ良いのか。ナズナにはわからなかつた。

「あんま気にすんな。俺もナズナ相手にこんななるとは思つてな

かつたから。これから氣をつけよくな。お互に。それで、この話はおしまいにして、これまで通りにやつてくれるとありがたい」ナズナはぶんぶんと頭を振つてうなずいた。

しかし、当分忘れることはできそうになかった。

アレクサンドリア図書館。

その象牙色の列柱の壯麗さに魅せられ立ちぬくものは後を経たなかつたらしに。古代、ギリシア時代のドーリア建築様式を想起させると言われているが、詳しいことは空也にはわからない。スノップに言わせると色々間違つてゐるらしいが、それで建物の美しさそのものが損なわれるわけでも無いので、空也は氣にならなかつた。

「パルテノン神殿？」

最もありきたりな感想を口にする唯だつた。しかし、初めて訪れた時の空也の感想はもつとひどいものだつたので、とても馬鹿にはできない。宇宙を感じる、と電波なことを言つてしまつた。それもスノップの前で。スノップの反応は推して知るべし。思い出したくも無かつた。

館内は空調が行き届いていて、すこぶる快適な環境が保たれている。空也の背丈よりもはるかに大きな書架が並んでいるが、それらをひとまず無視して、奥のエレベーターから地下に潜る。

膨大な書籍、映像、音楽、ゲーム。

それらは參照回数を元にしてソートされている。つまり、人気のあるものが自動的に上層に配置される仕組みだ。ただし、年齢制限のあるものは下層に配置される。十八禁仕様のものは地下十八階から。気になりながらも空也は未だ足を踏み入れたことがない。

地下七階に着いた。エスパー・マミーの一巻を本棚から抜き出す。一度ブックマークしてしまえば、あとはわざわざ足を運ばなくとも借りることができる。

空也から本を受け取つた唯はぱりぱりと数ページめぐると、すぐこれを閉じた。

「さて、と。空也に聞いてみたいことがあつたの。実は」「なんだよ。改まつて。もしかしてナズナのこと? それともまさかスノップ?」

空也が思いつく限りはそれくらいしかないのだが、唯は静かに首を振つた。

「空也は」の本読んだことあるんだよね?」

「ああ。うん。いや……どうだつたかな。内容までは覚えてないかも……」

不穏な空気を感じた空也は曖昧に言葉を濁した。閲覧履歴には空也の名前が残つているはずだ。見ればわかる。そんなことをわざわざ尋ねる唯の真意を量りかねていた。

「クラスの友達から借りたつて言つたよね。でも、それにしては変なの。エスパー・マミーの閲覧履歴に残つているのは三人の名前だけ。全部は見てないんだけどね。過去三ヶ月間の記録にはそれだけだつた。誰の名前があつたと思う?」

空也は咄嗟に答えられない。空也とナズナとスノップの名前が記録されている。それは知つていて。しかし、答えるべきか否かの判断がつかない。唯の疑惑は晴れていなかつた。そして、その種は芽吹き、すくすくと成長していた。

空也とクーヤが繋がる。

それだけは何としても阻止しなければならない。

「空也とナズナとスノップ、だよ。これつて変だよね。単純に考えて一人足りないよね。私に貸してくれた友達の名前が無いの。どうしてかな?」

唯の中すでに結論は出ているのかもしね。最後の確認作業を行つてゐる。そんな感じに思える。空也は類似の場面を見たことがあつた。エスパー・マミーに追い詰められた犯人。その心境がこれほどまでに胸に迫つて感じられるとは。空也は面白させられ、白目を向いたゾンビとして復活する。現実と空想が絶妙に混ざり合つ。打ち切りを回避しなければ!

「記録を残さないようにしておこう」ともできるんだよ。他人に知られたくない趣味もあるよね。たぶん、そのせいじゃないかな？」

嘘はついていない。やるつと思えればできるのだ。エスパー・マニーに年齢制限はついていないが、暴力シーンやグロテスクな表現が含まれているので、それなりに説得力のある答えだつた。

「ふーん。そう。空也がそう言つなら、そういうことにしておこうか」

笑う唯の田は全く納得してこるようには見えない。

空也も誤魔化しきれたとは思つていない。

「今度、学校でクーヤに会つたらおんなじこと聞くから。それまでに騙されてもいいなつて思える答えを用意しておいてね。矛盾があつたら突きちゃうから」

「俺にそれを言つても仕方ないんじやないかなあ。貸してくれた友達に言わないと」

空也は慎重に言葉を選んだ。うかつな返事をしようものなら、自分でクーヤその人だと認めたことになりそつた。

「そうだよね。あはは。わたし何言つてるんだろ」

「ははは。唯はお茶田さんだなあ」

白々しい笑い声の一重奏が館内に響き渡つた。

美少女の漫透と拡散。

初めは楽しいだけで良かった。

物珍しさも手伝って、全てが良い方向に回っていた。
しかし、人々の間に美少女が漫透していくにつれて、ある種の根源的な疑問が沸きあがつた。

美少女とは何であるか？ またそれに付随する萌えとは？
美少女を世界に敷衍するにあたり、突き当たつたその形而上学的な難問。

それは偶像である。

それはイコンである。

それは幸福の形である。

それは願望充足である。

それは紳士淑女の嗜みである。

それは空想の產物である。

それは神であり、天使であり、悪魔であり、妖精であり、靈魂であり、ホムンクルスであり、異性愛であり、同性愛であり、隣人愛であり、少女性愛であり、振り籠から墓場までつきまとうものであり、喜びであり、怒りであり、哀しみであり、楽しみであり、知性であり、愚かさでもあつた。

連日連夜、喧々諤々と議論は盛り上がりを見せた。

しかし、それだけだつた。

人々は疲れていた。答えの見つからない問題に、それとは裏腹に世界中に拡散していく美少女に。

そして、崩壊が始まつた。

いつものように昼食を求めて購買部へ向かうクーヤを呼び止めたのは、全身で優等生を表現しているかのような男だった。背景に華麗な百合の花束が見えるのは、もちろんクーヤの錯覚だが、それを見せつけられているのはクーヤだけではないようだ。通行人が霧の彼方に霞んでいく強烈な存在感。太陽に近づきすぎたものは絶命する。クーヤはイカロスにはなりたくないが、さりとて名前を呼ばれて無視するわけにもいかない。

「授業が終わつたとたん、教室から出て行くから慌てて追いかけてきたんだ。これからお昼？」

「ええ。購買部でパンでも買つてこよつかと」

クーヤが営業スマイル全開で答えると、男は嬉しそうに笑う。その爽やかな笑みの向こう側には大蛇が潜んでいてもおかしくない。なにしろ第一級危険人物だ。アリサとはなるべく関わり合いにならないほうが良いと、クーヤの勘が告げている。

「もし良かつたらさ。お昼一緒に食べない？　お弁当作つてきたんだ」

さつと取り出された包みは運動会で日にするような大きさだ。中身は重箱で、色とりどりのおかずが詰められていることまで想像できる。購買部のもつさりしたパンと重箱弁当をうつかり秤にかけてしまつたのは痛恨のミスだった。アリサが作ったのなら、そつなく美味しいものが出てくるような気がする。購買部に罪は無いが、後ろ髪も引かれない。

「ええー。そんな悪いですよ」

口では否定しつつも、クーヤの足はもはや購買部には向いていない。「一人では食べきれないしさ。遠慮しないで」

謙遜は美德だが、何事も過ぎたるは及ばざるが」としだ。クーヤはお呼ばれすることに決めた。アリサの三歩後ろに位置取りをする。古文書に載つていた。男を籠絡するための四十八手。自衛のつもり

で読破したが、まさか実行に移すときがこようとは。

「あれ？ どうしてそんな後ろを歩いてるの？」

素で突っ込まれた。クーヤとしては笑うしかない。インチキ本だつたらしい。気を取り直してアリサの隣を歩くことにする。

「良妻プレイです。気にしないでください」

「そつ。なんだかよくわからないけど、楽しそうだね」

楽しそうなのはお前だろ、とクーヤは突っ込みを入れそうになる。見た目に騙された男の哀れな末路を想像してクーヤは同情した。しかし、クーヤはそこではたと気づいた。

たぶん、おそらく、まだ確信は持てないが、アリサはクーヤのこと

を。

自慢にはならないが、クーヤは男受けする容姿をしている。男の気持ちなら手に取るようにわかる。なにしろ同性だ。それゆえに良心の呵責に苛まれた。食欲に任せて安請け合いでをしてしまったような気がした。

後ろめたさに後押しされた部分が無かつたとは言えない。しかし、アリサの願いをできるだけ叶えてやりたい。それもクーヤの嘘偽りの無い本心だつた。

「折角だから、屋上に行きましょう」

クーヤはアリサの手を取つた。

少し戸惑つたような、それでいて嬉しそうなアリサの顔がなぜか強く印象に残つた。

クーヤは深く考へないようになつた。しかし、もう一度アリサの顔をのぞき見る勇気は持てなかつた。

ちなみに包みの中身は予想通り重箱弁当だつた。和洋折衷のおかずはどれも絶品だつた。

何だか申し訳ない気持ちになつたクーヤだつた。

「ねー。クーヤ。噂になつてるよ。一人でお弁当広げてたつて」

放課後の教室には西日が差し込んでいるが、まばらに人が残つてい

る。反論しようとしたクーヤが口を開こうとしたら、ポツキーを突っ込まれた。

「あー。しゃべるのはあまりオススメできないかなあ。噂はしょせん噂。けれど本人が話すことは噂じゃないからねえ。おんなじこと聞くつて言つたけど、聞けなくなつちゃつたじゃない。隠れて何かやつてるのは別にいんだけどね。迂闊すぎるよ。そんなんじや、第一、第三の探偵さんが現れて、今に收拾つかなくなるよ。ゾンビにはなりたくないでしょ？」

唯はポツキーをクーヤの口にぐいぐいと押し込んでくる。

「クーヤがどうしたいのか全然わからんない。私、忠告したよね？
相互不可侵条約の話。女子の間では暗黙の了解事項なの。クーヤも女子、だよね？」

あからさまに昼食時のこと話題にしてるのに、アリサの名前は一度も出さない。

クーヤは素直に感心していた。唯の口ぶりだと、噂は大分広がつて一人歩きを始めていそうだ。ポツキーと一緒にある程度の事情も飲み込めた。

「その点は大丈夫。私、全然その気ないから」

何しろ相手は男だ。色恋沙汰に発展する可能性は万に一つも無い。

「その気も無いのに相手してるの？ 周りからどうこう見られるか、気づいてないでしょ？ 面倒くさいことになるよ。絶対」

「ただの友達だよ？」

「相手はそうは思つてくれないってこと」

唯は首を横に振つてため息をついた。机に手をついて立ち上がる。

「トイレいこつか？」

有無を言わせぬ唯の迫力にクーヤはうなずくしかなかつた。

個室に押し込められた。

言つまでもなく女子トイレの個室だ。唯が後ろ手で鍵をかけるのが見えた。即席の密室空間。逃げ場はない。

「可愛い女の子はね。それだけで標的になるんだよ。そこんところ
かってる？」

唯の人差し指がクーヤの顎を下から持ち上げる。

「わかつてるって」

責められる理由が理由だけにクーヤは強く出られない。クーヤにだつてアリサを騙しているという罪悪感はある。だが、クーヤにはクーヤの言い分がある。それを説明できないのがもどかしい。

「わかつてないよ。相手が誰のことを指しているか、言つてみて」

「……アリサ」

唯の質問の意味がわからない。噂になるような行動はアリサとしかつていらない。噂は唯の耳にも入つてはすだ。わざわざ確認するようなことなのだろうか。

「だからわかつてないって言つたの。違うよ。面倒なのはアリサじやない」

唯はそこで言葉を切つてクーヤに密着すると耳元で囁いた。
「面倒なのはほかの女子、だよ。このままだと嫌がらせされるよ」

「い、嫌がらせ？」

答える代わりに唯の手が伸びてきた。未知の感覚がクーヤを襲つ。

「そ。嫌がらせ」

唯は微笑みながらクーヤの胸を揉む。

クーヤは驚きと不安がない交ぜになつて声が出ない。体をよじらせて逃げようとするが、壁に押しつけられていてこるつえこ、唯にぴつたりと張りつかれて思うように動けない。

「私だつてクーヤには悪戯したくなるもん」

熱い吐息を絡ませながら、唯の右手はクーヤの敏感なところを探り出そうと蠢いている。その手に合わせて複雑に形状を変える自分の胸の膨らみを眺めていると、クーヤは倒錯的な感情に支配されそうになる。

「ん……やあ、やめ！」

「やめなこよ。そんなかわいい声出されてやめられると思つ？ ね、

「脱がすね」

クーヤの返事をまたずにブラウスのボタンに指がかかる。唯の腕をつかんで振りほどこうとするが、思ったよりも力が入らない。簡単に組み敷かれてしまう。

もかくうちにボタンは次々とはずされていく。包まれた豊かな胸が外気に触れてヒヤつとする。

……ダメだって

「うん。ダメだね。でもやめないと

唯の中指と人差し指が下着の上から器用にクーヤの胸の突起を挟み込んだ。

「んんんつ！ やあ」

声にならない悲鳴が喉から漏れた。その大きさに愕然としてクーヤは片手で口を塞ぐ。そのせいで下半身の防備がおろそかになつたのを見逃さず、唯の左手がスカートの中に忍び込んできた。クーヤは両手で押しとどめる。

「やだ。やめよ。こい。ねえ。やめよ
「ケーキのことをなつてこないだつてこないでよ。いいこい
としたこい」

首筋に吸いつかれた。そのまま鎧骨の上のくぼみにかけてゅつくりと脣で愛撫される。

クーヤは恥ずかしさと混乱でぐぢゅぐぢゅだつた。

昼食後に飲んだ薬の効果が持続しているせいなのか、体が元に戻る
予兆は感じられない。しかし、唯に触れられるたびに予期しない反
応を返す自分の肉体がクーヤは恐ろしくなってきた。クーヤの、つ
まり女の子の人格が顕在化して、肉体まで支配し始めているかのよ
うだった。

「ねえ。おっぱいやわらかいね。自分でしたことがある?」

「そ、そんなのあるわけない！」

唯は下着の中に指を滑り込ませて、クーヤの胸を直接触り始めた。足に力が入らず生まれたての小鹿のように震えてしまう。そしてつ

いにスカートの中への侵入を許した。

「もうやだよ。やめてよ。どうしてこんなことするの？」

必死に搾り出した声はかすれていた。

「私ね。クーヤ見てて思ったの。たぶんどっちでもこいんだって」「どっち、うんっ。でもいって」

内ももを撫でられてこそばゆい。肉体の変化をかつてないほど意識させられているのに、体は全然戻ってくれない。それよりもクーヤは下腹にたまり始めたもどかしさのほうが気になり始めた。身を委ねてしまいたくなる甘い誘惑。

「女の子が相手でもいいかなって。そういうこと」

唯の手がクーヤの秘密に触れる。クーヤの感覚ではそこには何も無いはずだったが、口からは艶を帯びた熱いものがひとりでに漏れ出した。

クーヤは恐ろしくなつて唯を突き飛ばした。だが、唯は体を捻つて衝撃をずらし、ぞつとするほど妖しく微笑む。

「ね。ホントやめて。女の子同士でそういうことする気になれないから。唯の気持ちは尊重するし、唯が女の子を好きでもかまわないけど、私は応えられないの。これ以上すると強姦だよ。唯のこと嫌いになりたくない」

クーヤは意を決してかなり強く出たつもりだったが、実際に出すことができたのは蚊の鳴くような声だった。きっと両尻に涙もたまつている。悲しさと悔しさでいっぱいだった。

唯はクーヤのパンツに指をかけたままその反応を楽しんでいるかのように笑つていたが

「うん。やめるね」

と、それまでの言動が嘘のよつとあつさつとクーヤの体を解放した。

「ふえ？」

塞き止めていた涙が安心を上乗せされたせいで少し漏れた。止めうと思つても止められない。

「あー。もう。泣かない。泣かない。よしよし。いい子いい子」

自分より頭半分小さな唯に抱きしめられて撫でられてしまつ。身の危険は去つたようだが、クーヤの混乱はますます混濁の度合いを深めていく。

「自重しないと。いじめられるよ？ 女の敵は女って聞いたことくらいあるでしょ？ 確かめたらちゃんと女の子の体だし。どうなつてるの？ いい加減教えてよ」

クーヤは事態の急変についていけず、話すべき内容も思いつかず、けれども一つだけ確かなことに思い当たつた。

「だ、だましたな」

「それはお互い様、だよね？ クーヤは騙されやすいんだから気をつけなよ」

唯は話しながらも、テキパキとクーヤの乱れた衣服を直していく。「誰が敵で誰が味方かくらいは見極めないと。なんかキナ臭いよ、あの二人」

「ナズナとスノップのこと？ まさか」

「それにアリサも、かな。アリサはまだわからないけど要注意。ところでクーヤは隠す気あるの？ それならそれで私も知らないふりを続けるつもり。別に大した問題じゃないからね。それは、ちなみに私はいつでもクーヤの味方だよ」

最悪の出会いを果たした唯がナズナとスノップの一人に悪感情を持つのはうなづける。しかしアリサとなると話は別だ。唯とアリサには接点が無いように思える。幼なじみの深く落ち着いた瞳にはいつたい何が映っているのだろうか。

「一次ソースに当たつてみるまでは信じたくなかったけど。こりゃ

時間の問題かな」

困ったように呟いた唯の横顔から推察すると、事態はクーヤの思つてこるよりもずっと深刻なかも知れない。

「ところで、どうやつたらおっぱいって大きくなるの？」
とぼけたことを言しながら、唯は自分の薄い胸を両手で押さえている。確かに起伏の乏しい体をしている。

「なんか失礼なこと考えてない？ クーヤは顔に出すぎだよ

「……ユイは勘が良すぎ、だよ」

意味ありげに相好を崩した唯を見て、クーヤは嘆息するしかなかつた。

そして悪い予感というのを得てして当たるものである。
 「クーヤという不屈き者がいるといつのはこのクラスで間違いありませんこと！」

教室の扉の許容速度。その限界を見た気がした。

ふんぞり返つて仁王立ちしている少女が探しているのは、ばつちり名前を呼ばれていることからまず自分しかいないと思うのだが、クーヤは絶対に名乗り出たくなかつた。

凍てつくような青い瞳が教室の中を睥睨へいがいしている。田の覚めるような鮮やかな金髪。日本人離れした容姿は圧倒的な質感をたたえていて、全くもつてミスキャスト。全身から主役のオーラを発散している。お近づきになるのも恐れ多い。平穏とは無縁、生まれながらのトラブルメーカー。それが爆弾を抱えてやってきたようなものだつた。

不幸なクラスメートが、そばにいたという理由だけで捕まえられた。クーヤは祈る。安寧あんねいを。決して自分の名前を告げてくれるな、と。だがそれは期待するだけ無駄だった。問い合わせ先の顔色を見れば一目瞭然。いかにも簡単に白状してしまった。クーヤの念头波よりも少女の眼光のほうがはるかに強い。

「アリサ公認ファンクラブ、会員ナンバー一番のミズハナさんだね。害虫駆除には情け容赦ないらしいよ。困ったね。逃げていい？」

小声で教えてくれるとともに薄情なことを口にした唯にクーヤは力なく首を横に振つた。面倒くさそうなため息が聞こえたが、彼女は席を立つようなことはしなかつた。

つつがなく情報を仕入れ終えたらしげミズハナが一步一歩ゆっくりと近づいてくる。

その迫力に押されるようにして人が避けていく。ミズハナからクーヤまで伸びる見事な導線ができあがつた。クーヤは振り返つてみた。

当然ながら誰もいない。

クーヤの席の正面でミズハナは立ち止まつた。
傲然と見下ろされているというのに、反抗しようといつ氣力すらわかない。

絶対的強者の威儀というものがあるとするならば、いま感じているものがまさにそれだつた。

「クーヤというのはあなたですね」

ミズハナは片手を腰に当てて、優雅とさえ思える仕草で人差し指を突きたてた。

しかし指されたのはクーヤでは無かつた。まっすぐ指を向けられているのは唯だつた。

「いいえ。違います」

指された唯は笑顔で冷静に即答した。

ミズハナは固まつてゐる。

腰に当てた腕の角度、相対する体、わずかにそらした顎、纏みに満ちた目つき、唇の動き、声の抑揚、全てが調和し、計算されつくしてゐた。誰が見ても完璧だつた。最後の最後、それ以外は。

クラスのそこかしこから押し殺した笑い声が漏れる。

ミズハナは一度目を閉じて、そのあと、先ほどと全く同じ動きを繰り返した。

「クーヤというのはあなたですね！」

若干声が裏返つていて、顔が赤くなつてゐるところ以外は完璧だつた。

笑い声の発生源が増えたような気がする。

「……そうですが、あなた誰ですか？」

「下賤なやからに名乗る名など持ち合わせていませんわ。と言いたいところですが、あえて名乗りましょ。ミズハナ、と申します。以後、お見知りおきを」

大恥をかいたにも関わらず、ミズハナは威風堂々。芝居がかつた仕草を何事も無かつたかのように続行する。

相手にしたくないと考えていたクーヤだつたが、意外と心配する」ともなさそうだと思い直した。

「それで高貴なミズハナさんがいつたいじのよつなご用件でしょうか？」

「それはじ自分の胸に聞いてみるのがよろしくてよ。思い当たる節がありでしょ！」

「それが全くじぞこません。なにしろミズハナさんにお会いしたのはいまが初めてなのですよ。あろうはずがないではありませんか」ミズハナの調子に合わせて、クーヤも声の調子をえてみた。ミズハナの眉毛はぴくぴく、鼻はひくひく動いている。わかりやすい人だった。

「なんという恥知らずな人なのでしょう！ あなたののような人がいては、風紀の乱れの元になります。調べはついているのですよ！ 衆人環視の前で罪状を読み上げられたいのですか！ 懺悔する機会を与えようという恩情を踏みにじられて、私は大変心苦しく思っています。本当に心当たりがないとおっしゃるおつもりですか！」

「ミズハナさんがいらっしゃった時点アレだよね」ミズハナに怒りに満ちた眼差しを向けられて、唯は肩をすくめて見せた。

「ご友人も認めておられるではありませんか。言い逃れはできませんことよ」

しかし、ミズハナに意に介した様子は無い。逆に落ち着いたようだ。自身の正当性に自信が持てたらしく。

「じ飯食べたことですか？ もしかして」

「その通りです。どのような申し開きをしようと許すつもりはありませんが、一応聞いてあげないこともないですわ」

「えーと。そうですね。ミズハナさんがお弁当作って誘えばホイホイついてくると思いますよ」

ミズハナの顔色が朱色に染まる。

「そ、そういうことを言つてはいませんわ。何を言いだ

すんですか。まったく。これだから下賤のものは、
ミズハナはうつむいてもじもじし始めた。

あと一押しで退けられそうだ。そう思っていたクーヤだったが

「おじょうさまー。おじょうさまー。ミズハナおじょうさまー。ど
こですかー」

廊下から聞こえてきた声が予想外すぎで、頭の中で組み立てていた台詞がガラガラと音を立てて瓦解した。

息せき切つて現れたのはメイドだった。学生服を着ているのだが、雰囲気がまさにメイドなのだつた。メイドが服を着て歩いていると、あんな感じになるのではないか、と思わせる何かがその少女にはあつた。

「ああ。ここにいらっしゃったのですね。また一般人に迷惑をかけて。ダメですよ。ミズハナさまに触れていいのは私だけなんですから」

忙しく現れたメイドはそのままの勢いでミズハナの腕を取つて引きずつていいく。

「このダメイド！ 離しなさい！ 私は大事な話をしているのです。聞いているのですか？ ダメイド！」

「ええ。ええ。聞いておりますとも」

ダメイドと呼ばれた少女は罵られながらも嬉しそうにミズハナを運んでいく。そのまま来た道を誰に遮られることも無く、ミズハナはフェードアウトしていく。

「下々のみなさま。お騒がせいたしました。ミズハナお嬢様とダメイドはこれにて失礼いたします」

自らダメイドと名乗った少女は敷居のところまで一礼した。そしてそのままミズハナを連れて姿を消した。

「はーなーすーの一でーすー」

ミズハナの悲しげな叫び声が教室のクーヤのところまで届いた。ドップラー効果のおかげで確實に遠ざかっていることが知れた。

「なんていうか……凄く濃い人たち」

「……クーヤがそれを言つんだ」

「え？　え？　変なこと、言つたかな？」

唯はうろんそうな目をしてミズハナたちの消えた先を、そしてクーヤを見つめていたが

「ううん。ぜんぜん！　私もクーヤとおんなじ意見だよ」と、にこやかに言い放つた。

「それで、アリサさんはミズハナさんのことをどう思つてるんですか？」

重箱弁当に箸を伸ばしつつ、クーヤはアリサ本人に直撃してみることにした。

「そういうことを聞くのはどうかと思いますよ、わたしは」

同じく箸を伸ばしている唯が答える。旗色が悪いと見てクーヤは唯を巻き込むことにしたのだが、彼女を連れてきてもアリサは特に何も言わなかつた。

「特別な感情はないかなあ。よく知らない人だしね。学年も違うし涼しい顔をしてアリサは何気に酷いことを言つ。

空は快晴。校庭の桜は花を散らし、青々とした新緑が風にさざめいている。心地良い陽気に誘われるようにして、クーヤの箸はドンドン進む。アリサの料理の腕前はなかなかのものだつた。最初は乗り気でなかつた唯も、なし崩し的に連日クーヤとともに屋上に足を運んでいた。

「面白い人だとは思つよ。魅力的なんじやない？　ミズハナさんのことが好きな人の話もちらほら聞くし

「そうですか」

クーヤが相槌を打つと、アリサは何か言つたそうな顔をしてクーヤの顔色をちらちらとうかがつていて。クーヤとしては、何を言つわけにもいかずに助けを求めて視線を流した。唯の目は明らかにあきれていた。

「……まあたまには私も直球投げてみますか。あんまり得意じやな

いんですけど。そういうキャラでもないんだけどなあ

唯はぼやくと、たつぱり一呼吸置いた。

「アリサさんはクーヤのことが好きなんですか？」

アリサ沈黙。

クーヤも沈黙。

唯は一人でお茶を啜つてゐる。

「そ、それを聞くのはどうかと思つよ」

「クーヤの真似をしてみただけだよ」

硬直からやつとの思いで立ち直つたクーヤだったが、一の句が告げられなかつた。針のむしろに座らされていようだつた。

「クーヤはテリカシー無さ過ぎ。相手の気持ち考えて無さ過ぎだよ。イヤでしょ。そういうこと聞かれたら。自分のいないところだつたら、なおさらだと思うけど」

唯は痛いところをズバズバと的確についてくる。

「……僕は好きだな」

黙つて話を聞いていたアリサがぼそつと呴いた。

「は？」

「あ、いや。クーヤが好きとかじゃないよ！ それは全然違うから！」

二人分の視線を一身に浴びてあわてて訂正を入れるアリサ。

恥ずかしいやつだつた。穴があつたら埋めてやりたい。そして臭いものには蓋をするのだ。平穏な女子高生ライフを満喫するためにアリサには犠牲になつてもらう。それがクーヤの望みだつた。

「自分のことを密かに好きになつてくれてる人がいたら、それは嬉しいなつて。そういうことだから。別の意味はないから！」

アリサのせいでクーヤまで恥ずかしくなつてきた。

唯は地雷を設置するだけ設置して、あとは知らないふりをしている。クーヤが恨みがましく見てもどこふく風だ。

氣まずい空氣に耐えられなくなつてきたクーヤは屋上の出口に目をやつた。すると天の助けのように扉が一人でに押し開かれた。やけ

に荒々しく乱暴だったのは、この際気にしないことにした。妙な空氣を打ち破ってくれるなら誰でもよかつた。

扉の奥から現れた少女は制服をはためかせて凜々しい姿を衆目に晒している。一度目にすれば忘れたくても忘れられない。クーヤは厳しい現実を直視できなかつた。話題のミズhanaその人だつた。ミズhanaはつかつかと大股で歩み寄つてきて、ビシッとクーヤに人差し指を突きつけると

「勝負ですか！」

と開口一番、意味不明なことを口走つた。

ぽかんとしている一同を無視して、ミズhanaは屋上の外縁まで進み、両腕を組んで胸を張つた。ミズhanaの背後に巨大スクリーンが出現する。

「あ、放送されてるみたいだよ。これ

唯の手元に浮かぶミニスクリーンには、ミズhanaを正面からとらえた映像が流れていた。

「全校生徒のみなさま！」

巨大スクリーンにはミズhanaの勇姿が大写しになつていて。「生徒会名誉会長のミズhanaです。本日はお知らせしたいことがあつて参りました。賢明なる皆々さまにおかれましては、すでにお気づきになつておられる方もいらっしゃるものと存じます」

スクリーン上では右から左へ次から次へと文章が流れしていく。

「お知らせつて何だ?」「会長じゃなくて名誉会長w」「この人だれ?」「情弱おつ」「生徒会名誉会長のミズhanaさんだつて」「だから誰だよ」「情弱乙」「うぜえw」「ミズhanaさんなめんなよ」「またお前かwww」などなど。誰でも自由に書き込みできるようだ。

クーヤは頭が痛くなつてきた。

「この四月、私がとあるクラブを立ち上げたのは衆知の事実だと思います。美しいものは共有すべき財産である。そのシンプルで素晴らしい理念に共感してくださつた皆さまのおかげもあつて、創部以

来、門戸を叩くものはあとを絶ちません。応援のお便りも多数いた
だいております。全てが順風満帆。私は皆さまの良心を信頼し、ま
た皆さまはそれによく応えてくださいました。立ちはだかる障害な
どあるいはすもありません

ミズハナはそこでいつたん演説を止めて、クーヤたちに向かつて視
線を飛ばした。ミズハナの視線に追従するようにスクリーンの映像
も流れしていく。お弁当を囲む三人の姿が容赦なくスクリーンに映し
出されたが、映像はすぐにミズハナの姿に切り替わった。

「しかし美的感覚。それは個人の主觀によるものです。そこで私は
考えました。誰にでも明快にわかりうる基準を設けることを。私は
ここに宣言します。第一回、美人コンテストの開催を！」

校内のあちこちから歓声が響いた。

クーヤは「私怨おつ」とこつそり書き込んだ。しかし、クーヤの叫
びは画面を埋め尽くさんばかりの文字の奔流に呑まれて儚く消えて
しまったのだった。

ダークブラウンの湖面に白い渦が広がっていくのを眺めながら、空也はため息をついた。

「なんだか大変そうだね」

「ううなんだよ」

空也とナズナは恒例のお茶会を開いていた。服装は前回と同じく学校の制服だ。続きとやり直しをナズナが強硬に主張したからだ。ナズナには何か譲れないこだわりがあるらしい。空也は不思議に思つたが、反対する理由も無かつた。

「それで、出場するんだよね？ コンテスト」

確認するように聞かれて空也は返事に迷つた。

ナズナの中ではクーヤが出場することは決定事項のようだが、空也に出来るつもりはない。

「自薦、他薦は問わずだからホントリーはされてるみたいだけど……」

「あ。マジで？ なんかやらしー」

ナズナは揶揄するように言ひ。

「ミズハナさんもお気の毒に。自分が争つてするのが男だと知つたらどんな顔をすることやら」

「だーかーらー。出ないって。最終的に出るかどうかは自分で決められるから」

「出たほうが良いと思つた、私は。といつよつは出て欲しい」
ナズナは苺のショートケーキにフォークを入れつつ、空也のほうを見ないでそんなことを言ひ。

「どうして？」

「面白そだだから、じゃダメかな？ ホントは別の理由があつたりして」

にひひと笑いながら、切り分けたケーキを口に運ぶ。バランスを

失つてケーキがぱたりと倒れた。

「教えてくれないんでしょう。どうせ」

「そんなこともないけど……ねえ、なんか機嫌悪くない？なんか

気に障るようなこと言つた？」

「……いつも通りだと思つけど」

空也はショートケーキの上の苺をフォークで突き刺した。

一人で黙々とケーキを食べ続ける。

『なんかキナ臭いよ、あの一人』

もつと話したいことはたくさんあつたはずなのに、唯の忠告が頭の片隅にこびりついて離れない。そのせいでどこかぎこちなくなつてしまつ。

「空也が考えていること当ててあげよつか？」

ナズナは最後まで残しておいた苺をフォークの先で弄ぶ。

「たぶん、だけど……私たちのこと、だよね。話してないことはあるよ。隠し事してるの。口止めされてるから教えられないけど」

ナズナは空也のほうを決して見ようとしない。

「コンテストに出て欲しい理由はわ。クーヤの晴れ姿なら見てみたいいじゃない。私も出ようがどうか迷つてるんだけど、空也が出るなら出てもいいかなつて」

「ナズナの学校でもあるんだ」

「あー……うん。そう。どこもあるんじゃない？ そういうイベントつて」

ナズナの目は泳いでいるが、空也はそれ以上突つ込んだことを聞けなかつた。

ナズナの後ろに付きまとうスノップの影は気になる。けれども、あまりしつこくすると嫌われてしまうかもしれない。空也はナズナが自分とスノップを天秤にかけるところを想像しかけて、しかし急いでその不吉な想像を打ち消した。

現状維持。

それが一番良いような気がした。

「ところで空也。それせうだと思つから準備してね

「準備?」

「ケーキ美味しかつたでしょ?」

ナズナは悪戯つ子そのものの目をして笑つてゐる。

空也の疑問が解ける前にそれは起こつた。全身が燃えるように熱かつた。細胞の一つ一つが収縮しているようだつた。脂汗が滲み出でくる。

「空也がいけないんだよ。私の頼みを聞いてくれないから」

「……な、何を」

自分の口から聞きなれた、しかし自分のものではない声が聞こえて空也は口を押さえた。声が一オクターブ近くも高かつた。さらに股間と胸の辺りがむずむずしてきた。なんとなく自分の体に起きていることがわかり始めて、空也は股間に手を当ててみた。あるべきものが小さくなつて体の内側に入り込もうとしていた。服の上からではわかりにくいが胸も大きくなりつつある。

「スノップにお願いしたの。空也の意志とは関係なしに女の子になつちゃうようについて」

「な、ナズナのバカ。スノップのアホ」

体の熱は嘘のように引いていた。その代わりに空也は完全にクーヤになつてしまつていて。戻ろうと念じてみても、全く戻れそうに無かつた。

「だつて、じうでもしないとクーヤは会つてくれないでしょ。女の子同士でお茶会したかったんだ」

「女の子同士つて。俺は男だ!」

「細かいこと気にしない。ねえねえクーヤ。これ着てみて。絶対似合つから」

ナズナがテーブルに広げて見せたのは、フリルやレースがふんだんにあしらわれた可愛らしいメイド服だつた。男としての大事な一線を越えてしまいそうな危うや。空也は思わず腰が引けた。できることがなら穢便に回避したいところだつた。

「あ。まさか逃げようとか考える? 私がコスプレしてゐるの見て、空也は毎回楽しんでたよね。それなのに空也はコスプレしてくれないんだ。悲しい。海溝深くに沈んで立ち直れないかもしね。そんなに薄情だとは思わなかつた。悲しみの中で泣き暮らせと言つのですか。む、むごい。むごすぎる」

「……ナズナつて人生楽しそうでいいね」

空也は渋々メイド服を受け取つた。

「なんだかんだ言いながら着てくれるから空也つて大好き」

社交辞令だとわかつていても、笑顔で言わると悪い氣はしない空也だつた。

手早く着替えて戻つた空也が目にしたのは、同じくメイド服に着替え終わつたナズナと、その横で嬉しそうにしているスノッブ。見なかつたことにして帰りたかつた。

「なんかごめん。今回は本気で謝る」

ナズナに深々と頭を下げられては、空也は怒るに怒れない。

「えー。いいじゃんか。俺だけのけ者にしなくとも。ナズナの言つとおり協力してやつただろ。こんな面白そうなイベントに現れないと思うほうがどうかしてると思つぜ。俺を誰だと思ってる。期待を裏切らない男、スノッブ。だろ?」

「……調子乗りすぎ。これ以上、トサカにくる」と言わないでね。いくら私でも我慢できなくなるかもしねりから」

ナズナに叱られても、スノッブはまるで聞こえていないかのように振舞つてゐる。三人分のカップを並べて、かいがいしくポッドから紅茶を注いだ。

「美少女に囲まれてお茶会。男の夢だね。空也ならわかるよな」

「……どこから突つ込めば。俺は男だし、美少女として答えるなら『わからない』と言うべきなのか」

「『まけこたあいいんだよ。ナズナだつて言つてただろ。メイド服、一人とも似合つてゐる。最高だ!』

空也はため息しか出てこない。見るとナズナも同じようにため息をついていた。一人で顔を見合させて苦笑した。

「その一人だけでわかりあつてます、みたいな態度。普段なら許せんところだが、何故か許せてしまうな。ぶつちやけるとかなりタイプだ」

「……お前、アホだろ。いや、アホなのは前から知つてたけど」

「ふふふ。いまなら何を言われてもご褒美に聞こえるぞ。罵りたければ罵るがいいさ。そんなこと止められると思つたのなら大間違いだ！」

スノップは眼鏡のフレームに指を当てて格好をつけてくる。空也は諦めて大人しく席に着いた。

「しかし、それにしても化けたなあ。クラスの男子どもが羨ましいね」

しみじみと呟きながら、ジロジロと品定めをするように眺められて、空也は自分の体を守るように抱いた。なんとなく隠したかった。

「スノップ。いい加減にしたら？ セクハラだよ」

「セクハラつて。コイツ男だぞ？」

「でもスノップがクーヤを見る目は男を見る目じゃないように思つんだけど？ 私の気のせい？」

ナズナに図星を指されて言葉に詰まるスノップを見て、空也は助かつたと思った。

「まあ空也もたまに私のこと、そういう風に見てる気がするけど」
全然助かっていなかつた。見事に飛び火していた。

「つて、『冗談だよ。一人とも何黙つちやつてるの？』

ナズナは一人で楽しそうに笑つてゐるが、男一人はぎこちない笑みを浮かべることしかできない。

「生理的なもんなんでしょ。私にはわからないけど」

軽快な語り口で傷口に塩を塗りこめてくる。

空也はスノップに目だけでサインを送つた。スノップも即座にサインを返してきた。芸術的なアイコンタクトが繋がつた。一瞬の間に

力強い結束が生まれた。

「スノップは俺の美少女っぷりを確かめていただけだと思つた。ほら、薬を提供したのもスノップだる。だから色々気になるところがあつたんだよ。きっと」

「そう。よくわかつてゐるじゃないか。空也が女のふりをして学校生活をしているのが、信じられなかつたからな。おかしなところを探してたんだが、ちょっとやそつとじや見当たらぬなつて感心してたんだ」

「えー。なんか怪しいんだけど。一人が仲良くしてるとこり初めて見たよ、私」

ナズナはいかがわしいものを見る目をして一人を見ている。

空也は諦めない。そしてスノップも諦めない。男の沾券に関わる問題だからだ。共同戦線はどちらかが脱落した時点で突破されてしまう。それだけは避けなければならない。

「スノップ。立ちな！」

「お、おう。なんだかわからんが付き合つぜー…」

空也とスノップ、二人で並び立つ。

スノップの頭が随分高い位置にあつて変な感じだが、自分が小さくなつてゐるせいだと空也はすぐに気がついた。見下ろしてゐるスノップと目が合つた。スノップも決意に燃えている。問題なさそうだった。

「スノップ。おっぱいでもどこでも好きなところ触れ！　H口いことなんか何も無いんだって見せつけてやるうぜー…」

「おう！　任せ……つて、おい！　そりや無いぜ！　それはいくらなんでも……」

言いよどむスノップ。

興味津々で事態の推移を見つめているナズナ。

空也は名案だと思うのだが、何故かスノップは躊躇している。

「何を恥ずかしがつてゐるんだ！　男同士だろ。浅はかな考え方を改めさせてやるんだろ！　戸惑う理由なんてないはずだ。スノップ、

聞いているのか。スノップ！」

「そういう問題じゃないような……だつて、お前、心はともかく体は完全に女になつてゐるんだよな？」

「あん？ わかんないやつだな。何が問題なんだよ？」

スノップは頭をぽりぽりとかいて、空也の後ろに回つた。腋の下から手を回して、空也の両胸を優しくつかむと遠慮がちに揉み始めた。

「どうだ。見たか！ これでも言いたいことがあるか？」

「いや、その。スノップが恥ずかしそうなんだけど。すぐ！」

ナズナに言われて、空也はスノップの顔を仰ぎ見た。両目を瞑つている。まるで苦行に耐える修行僧のよつだつた。

「な、なんつー顔してんだ……」

「頭ではわかつていてもどうにもならん」とはある。裏切るようですが、正直言つと、前屈みになりそうだ。不本意だ。すまない

「なら、早く離せよ！ いつまでも揉んでんじゃね——！」

空也はスノップの手を振り払つて、思いつきり突き飛ばした。怒りに任せて股間を蹴り上げる。両手で急所を押さえて内股に崩れ落ちるスノップ。ぴくぴくと痙攣している。

「あ、悪い。思わずやつちまつた。スノップ、大丈夫？ じゃないよな。マジでめん」

「お、お前というやつは……」

うめき声を上げるスノップの腰をトントンと叩いてやる。

「そんなに痛いものなの？」

「空也、説明して差し上げる。俺は限界だ」

スノップは顔を伏せたままで荒い息を吐いている。

「説明しろと言われても……神々の黄昏を感じずにはいられない瞬間、かな？」

「要するに世界の終わりつてことね」

「そう。それはラグナロク。つて、詩的に言えれば良いつてもんでもないだろ」

突つ込みながら立ち上がったスノップは青い顔をしているが、それ

なりに元気だつた。

気持ちを新たにして、三人でテーブルを囲む。

「なんか色々あつたような気がするが、俺が言いたいのはコンテストには出ろつてことだ。その話をするために来たんだ」

紅茶をちびちびと啜りながらスノップが切り出した。足を組んで格好をつけているが、いつもの余裕はどこにも感じられなかつた。だから空也の気持ちも自然と大きくなる。

「イヤだ。見世物になるつもりはない」

「美少女は学園生活の華だぞ。自信がないのか？ 無様に敗れ去る。それを恐れているようにしか見えないね」

「仮にそうだつたとしてどうだつて言うんだよ。メリットがない。男に好かれても嬉しくないぞ」

空也とスノップの間で火花が散つた。空也は絶対に譲らないつもりだが、スノップにも折れる様子は見られない。

「メリット、あるよ。自信ないけど」

ナズナが控えめに片手を上げて発言した。

「お似合いのカップルつてあるじゃない。あれよあれ。コンテストで優勝すれば、アリサとも釣り合いが取れるんじゃない？ クーヤが男だとは夢にも思われなくなるだろうし、いいことずくめだと思う」

あまりに建設的な意見に空也はぐうの音も出ない。スノップはスノップで微妙そうな顔をしている。スノップの口論見を粉碎したナズナに乾杯！ 空也は拍手喝采してあげたい気分だつた。

「ナズナさんは空氣が読めない子だね……」

「空也はどうしても出たくない？」

スノップのぼやきを完全スルーして、ナズナは意志の確認を迫つてくる。正攻法でこられると、空也としても断りにくい。まっすぐ期待に満ちた目を向けられるとなおさらだ。

「どうしてもつてわけじゃないけど、男に好かれでどうこうつていのちはちょっと……ナズナだつて同性に言い寄られたら困るだろ？」

「私？ 別にクーヤに……あー、ややこしいな。女の子のクーヤに言い寄られても困らないよ。抱きつかれてもイヤじゃないし」

ナズナは本気で意味がわからないといった様子で小首を傾げた。

「空也。諦める。相手が悪い。根本的なところで話が通じてない」

「自分だけ何でもわかつてゐみたいなふりして。スノップだつて全然わかつてないでしょ。ホントのところは」

「空也の名誉にかけてわかつてると思つぞ。不名誉なことだから言えないと」

ナズナは何か言いたげな顔をしてスノップをにらんだ。スノップは取り合はない。空也が收拾をつけるしかなさそうだった。

「出ることにするよ。なんか出たほうが良いよつな気がしてきた。確かにそうだ。男同士だと思つてゐるのは俺だけだもんな。男と女の友情は成立する。何かの本で読んだ」

「友情だつて。良かつたね。ナズナ」

どこからどう見ても裏がありそうな黒い笑顔をするスノップ。

「かんじわつる。友情から発展することだつてあるんだから」

「ナズナつて女の子が好きなの？」

「そんなことないけど？」

ナズナの顔に疑問符が浮かぶ。自分もきっと同じよつな顔をしているはずだ、と空也は思つた。

「ハイハイハイ。そこまで。空也はコンテストに出る。大切なことなので復唱します。空也はコンテストに出る。ハイ、みなさん」一緒に

「空也はコンテストに出る」

スノップは満足げにうなづくと、懐から小さな機械を取り出した。

アンテナがピンと立つてゐる。

「携帯電話を改造したんだ。おもしれーんだぜ。クーヤ、立つてみな」

言われるままに立ち上ると、スノップは機械を空也に向けてボタンを操作した。

「ふむふむ。二千か。まあまあだな」

「へー。凄いね。千五百が境目だから充分なんじゃない？ 可愛いな、とは思つてたけど」

ナズナも一緒になつてスノップの手元を覗き込んでいる。

一人だけ事情が飲み込めず、気になつてしかたがない。空也は一人の元へ駆け寄つた。

しかし空也の期待を裏切るように、スノップの持つ機械には「2000」と数字が表示されているだけだった。まるで意味がわからない。

「これな。美少女力を測定する機械なんだ。クーヤの美少女力は客観的に見ると二千。試してみるか？ サンプルはそこにいる娘でいいだろ」

「サンプルつて……まあいいけど」

スノップに教えられたとおりにナズナに向けて機械を操作すると、数字の表示がぐんぐん上昇した。三千を超えて、ファンファーレとともに数字がストップ。

「読み上げてみ？」

「三千七百、だな」

「あははー。また上がつてるとか。参つたな」

口ではそう言いながらも、ナズナは頬を赤らめてまんざらでもなさそうだった。空也は割とショックだった。

ナズナと自分を見比べてみる。

確かにナズナは可愛い。しかし、数字にして一倍近くも差があるようには思えない。自分に向けて機械を操作する。数字は急降下。二千で止まつた。何度やつても変化しない。

「あれ？ もしかして自分が可愛いとか思つちやつてた？ ナズナと並んでも遜色ないとか？ まさかそんなこといくらなんでも思つてないよね？ クーヤちゃん」

「スノップやめなよ。空也もそんなに気にすることないよ。千五百

超えてたら美少女の範囲に入るんだから。こんなのただの数字じゃん。人は見た目じゃないよ」

空也はナズナに再度機械を向けた。

ファンファーレ。表示は三千七百。

自分に向ける……一千。

「私だつて、昔は低かつたんだから。大丈夫。これからだよ」「ナズナは一桁の年齢の時には一千超えてたけどな」

スノップの慌てて口を押さえる仕草はいかにもわざとらしかった。

「だからスノップやめなよ。クーヤ傷ついてるじゃない」

これまでスノップに腹が立つことは何度もあつたが、ここまで凹ませたのは初めてだつた。ナズナの優しさが逆に痛かつた。

「舞い上がるバカにはこれくらいでちょうどいいんだつて。ミズハナさんとやらも、どうせ三千くらいはあるだろ。唯ちゃんだけ？ あの娘も一千は超てるはずだ。測つてないが、それくらいはわかる。長年美少女を見続けてきたからな。ナズナだつてそう思うだろ？ クーヤと唯のどちらが可愛いか。正直にどうぞ」

「それは……」

ナズナの困つたような目が全てを物語ついていた。それでも空也は認めたくなかった。

「スノップ！ ここの機械貸してくれ。ナズナが可愛いのは百歩譲つて良しとしよう。でもサンプルは一つじゃないか。俺がそれなりに可愛いと思う娘を測らしてくれ。頼む」

「もとからそのつもりだ。コンテストに出るからには勝たないとな。敵を知り己を知れば百戦危うからず、と大昔の兵法書にも載つてある。存分に測りたまえよ」

スノップは腕を組んで大仰にうなずいた。

「やつた。空也から見ても私つて可愛いんだ。やつた」

小さくガツツポーズを取つたナズナの姿は、しかし空也の目には入つていなかつた。

翌日からクーヤは唯、ミズハナ、ダメイドの美少女力をかき集めた。

唯
一千五百。

ミズハナ
二千一百。

ダメイド
一千三百。

結果は燐々たる有様だった。
惨敗、というほかなかつた。ミズハナはおろか他の一人にも水を空けられていた。スノップの見立ては正しかつたのだ。

そしてクーヤは悟つた。

自分はいわゆる「いらない娘」だということを。

もしも商品化されてグッズが出ようものなら、一人だけバーゲンセールのカゴに突つ込まれ、それでも売れ残つて、連日のように値下げの札が重ね貼りされる運命なのだ。

暴落、ストップ安、商品価値なし。おそろしいレッテルだった。

その日、クーヤは少しだけ泣いた。

時間は過去から現在に、そして未来へ向かって不可逆的に流れている。

過去の選択の結果として現在が存在する。現在の選択の結果として未来が決定される。

無数の選択肢。無限の未来。

選択によって収束していく世界。

漏斗に注がれる力オティックな情報。それを選別するフィルター。ろ過された無色透明な過去は、しかし、固有の情報を保持したままできらめく砂のように沈殿していく。

それは過去の可能性にほかならず、過去もまた無限の可能性を秘めていることにはかならない。

存在と時間の等方性について……。

ジニアの日誌より

ドクター、

渡された測定器を唯はためつすがめつ眺めていたが、実際に何度か操作して机に置いた。

「で、内緒で一人に会ってたあげく私に相談するわけね」

あきれたように言いながらも、唯はどこか楽しそうだった。

クーヤはあんパンの包装を破いて一口大にちぎった。目立ち過ぎるという理由で屋上での昼食会は無期限停止中だった。あの一件ミズハナのコンテスト開催宣言以来、アリサとの関係は急にそよそよしい他人行儀なものになってしまった。何日もまともに話をしていない。

「それでどう思う?」

「どうひで……まあまとも? ミズハナさんはこの学校じゃ一番可愛いでしょ。私も嫌いじゃないよ、ミズハナさん。遠くで見てる分には楽しい人だし。ちょっとアホっぽいけど。ダメイドさんはミズハナさんの影に隠れて目立たないだけで、レベル自体は高いし」

「……唯は?」

「私? 私は……そうだなあ。自分で自分のこと可愛いとか言つちやうのつてバカっぽくてやなんだけど……クーヤよりは可愛いんじやない? 測定を信じるなら」

冷静そのもので言わると、それはそれで凹まれるクーヤだった。「女の子に勝てなくともいいじゃん。というか、クーヤに負けたら私の立場ないんですけど。あー、良かった。美少女力低くなくて」
「ナズナが三千七百というのは?」

「うん? まあ、見た目は可愛いこと思つよ。見た目は。認めたくなあいけど」

唯も順番に異論はないらしい。残念ながら測定の正確さは疑いようが無かつた。

クーヤは遠くに座つていのアリサに測定器を向いた。
数字が表示される。三千五百。

「へー。男子も測れるんだ。今度、測らせてよ」

「アイツってカッコいいんだな。いまさらながら」

「……無視すんなし。別に数字が低かつたからって、全然がまわないんだけど。むしろ競争倍率低いほうが何かといいと思つよ」

「いいことないだろ?」

「そこは無視しなよ」

額をこづかれた。わけがわからなかつた。

「そんな顔しない。なんだか私がいじめてるみたいじゃない

「そうなの? 全然そんな感じはしないよ」

クーヤが聞き返すと、唯は難しい顔をして考え込んだ。

「クーヤがクーヤだつてことはわかってるんだけど……目の前にいるのはどこからどう見ても女の子なわけ。とつてもやつにくこの。」

知らない人と話してみたいで

「そんなもん？」

「そんなもんです」

言われてみれば、確かに男で会つ時は微妙に態度が異なつて いるような気がする。クーヤとして接して いるせいかも しれない。ところで、クーヤもたまに唯のことが全くわからなくなることがある。それも、自分が女の子を演じて いるせいなのだろうか。少しだけ考えてみたが、すぐにその考えは頭から追い出した。現時点では男として学校生活を過ごすことは考えられない以上、その仮定は無意味に思えたからだ。

「なんか手つ取り早く美少女力を上げる方法つて知らない？」

「私が教えて欲しいくらい。それにしてもなんで、わざわざミズハナさんに勝とうとしてるの？ 負けたほうが後腐れないよ。アリサからもスパッと手を引けば万事解決。その方が大過なく学生生活を送れるつて」

「それは……」

「まあどうせナズナにいといとこ見せたいだけなんでしょうけど」クーヤが何か言う前に、唯は一人で納得してふてくされた。当たつて いるだけに言い返せない。長い付き合いの中で性格を熟知されて いた。

「だからその顔やめてよ。ホントに苦手なの。というか、私って女の子苦手だったんだ。結構ショック……」

唯は頭を抱えてうずくまつた。

「ネガティブキャンペーンとかどうかな？」

「悪い噂を流すの？ ミズハナさんの？ あんまり意味ないんじやない？ ミズハナさんが人気なのって、あのキャラクターあつてでしょ。影で暗躍とか似合つタイプかなあ。ダメイドさんならありえるかも」

「よくそこまでわかるね。ちょっと感心した」

「あー、うん。そうだね。そうかも。嫌なんだけどなあ。自分のそ

うこうといふこと

どうにも歯切れが悪い。

クーヤがまじまじと見つめていると、それに気づいた唯は田を丸くした。

「なに？ もしかしてご飯つぶとかついてる？」
わたわたと口の周りを拭っている。

「ついてないよ。気になつてたのはもつと別のこと。誉めたつもりだつたの。それなのに不服そうだつたから」

「それはちょっと違う、かな。小ずるくて腹黒いの。自分より可愛い女の子って大嫌い。いなくなれて思つちやう。数字出たじやない？ 私は一千五百。それつて内面も加味されてるのかなつて。ミズハナさんとか……ナズナとか。その、やっぱり可愛いから」
唯は笑顔を見せているが、心の底から笑えているかどうかくらには、いくら鈍いクーヤでもわかることだつた。

「唯のいいところってさ。ちょっとわかりにくいつていうか……奥ゆかしい？ は、違うか。慎み深い、も違うな。田端が利くのは嫌なんだつけ？ 小動物みたいなのは……どうだろ？ マニアックかも」

「褒めるのか貶すのかはつきりしてよ」

「ゴニーク！ ゴニークなのが良いこと思つよ。一筋縄ではいかないところとかチャームポイント！」

「そうですか。クーヤの気持ちはよくわかつた」

唯はやれやれとため息をついた。唯の長所なんていくらでも知つているはずなのに、いざ言葉にしようとするが、適切な言葉が出てこない。クーヤは困り果ててしまった。

「……ありがと」

「は？」

唯の脣から滑り落ちた咳きは、小さすぎてクーヤの耳は拾いきれなかつた。

「なんでもない」

唯は照れくさそうに顔を背けた。

「なんでもないって……」

「クーザの言うことも一理あるなって思ったの。個性を大事にしようって。それだけ」

唯は少し恥ずかしそうに笑顔を見せた。

切り換える早さも唯の数ある美点の一つだつた。

「よし！ ネガティブキャンペーンでも何でもやつてやるつじやないの。火の無いところにだつて煙は立てられる。馬鹿と煙はなんとやらつて聞くわ。親和性は高いはずよ」

「……言い出しておいてなんだけど、止めた方がいい気がしてきた」

「だいじょーぶだつて」

唯の何かに火をつけてしまつたらしい。真剣な顔をして自分の世界に没頭している。既にクーザのことは田に入つていないようだ。

「怪我しないようにね」

「何言つてんの？ クーザも計画に入つてるよ」

唯は当たり前のように言い切つた。

全ての授業が終了した。一人は校内で適当に時間をつぶし、人気が無くなつてきたところで、ミズハナの教室に潜入した。唯は一直線に教室の中を突つ切つて、誰か おそらくミズハナの机の前で立ち止まつた。

「これが？」

「そう。ミズハナさんの机だよ」

答えながら唯はしゃがみこむと、躊躇無く机の中に手を突つ込んで漁り始めた。

「うわあ。信じられないことするね」

「別に何をしようつてもんでもないから。あー、うん。いたいた」
立ち上がつた唯の手には何も握られていない。

クーザは首を捻る。

「可視化するね」

ぼうっと淡い光を放ちながら唯の手のひらに現れたのは白いネズミだった。妙に長い耳をしているせいで、ウサギのようにも見える。唯の体を駆け上って肩に収まつた。おねだりをするように彼女の頬に体をすり寄せていく。

「何それ？　といふか、いつの間に？　突つ込みどじろ満載なんだけど……」

「昼休みの間に放つておいたの。追跡の秘密兵器よ。わかつてるとと思うけど、ソフトウェアで生き物じゃないから。その辺は大丈夫」ネズミの首根っこを捕まえてキスをする。そして放り投げる。ネズミは空中で体を入れかえて着地すると、一目散に走り始めた。転々としたネズミの足跡が繋がつて光の筋になつていく。すぐにネズミの姿は見えなくなつた。

「うまくリンクを辿り始めた。」これでミズハナさんの私生活をのぞく準備は完了。クーザ、どうする？ 行く？ それともやめる？

「行かないって言つたらどうするの？」一応聞くけど

「一人で行く。決まつてんじゃない」

「だよね。付きあつよ」

学園生活を送る上でミズハナの存在は無視できない。それならば、弱みの一つでも握つておいたほうが良さそうな気がする。実際、ミズハナのせいでアリサとの関係はぎくしゃくしている。実はクーザはアリサのことが嫌いではなかつた。あくまで同性の友人としてだが。

「それにしても、唯の知らない面をゾンゼン見せられて困惑ぎみなんだけど」

「知り合つたばっかなのに変なこと言ひのね。いいじゃない。男の前で猫被つてる女より

「それは……」

「もしかして、またナズナ？　いまのはそういう意味じゃないって。猫被つてるのはクーザのことだよ」

けらけらと笑い声を上げる唯を見て、クーザはひとまづ安心した。

帰宅途中に寄り道をする。

学生にはありふれた行動だが、ルートは無限に存在する。出発点と到達点を結ぶ最短コースを調べることに意味は無い。それは既に確立されたルートで、時間としては一瞬で行き来が可能だからだ。それにもしも自宅に入られてしまったならネズミ「」とセキュリティを突破できるとも思えない。

時間と距離の関係も同様にほとんど意味をなさない。速度が大き過ぎるせいだ。

ネズミの足跡を頼りにミズハナを追跡する。

たどり着いた先は、古い西洋風の街だった。

ミニチュアマップを呼び出すと、精巧な三次元のマップが中空に浮かびってきた。観光案内が始まりそうだったので、一次元簡略表示に切りかえた。

坂の街だった。

クーヤたちが立っているのは街の中腹あたりのようだ。遠くに海岸に打ち寄せる白波が見えた。

「なんだかいかにもそれっぽくて嫌な感じがする

「ミズハナさん、ここに住んでるのかな？」

「それはどうだろ。学校から直帰してること? それにプライベート空間のセキュリティを破れるほど高性能じゃないよ、私のネズミ」

石畳の上を転々とネズミの足跡が続いている。路地に入り見えなくなっているが、坂の上には古い洋館がそびえ立っているのが目に入った。

「登るか。それとも降りるか」

「唯は立ち止まつたまま考え込んでいる。

「降りてどうするの。賑やかそなのは確かにアツチだけど、足跡

は上を田指してゐる。素直に登ろう

「クーヤ。ちゃんとマップ見た?」

言われて、マップを再確認する。港があつて市場が開かれているのは低地。屋敷がぽつぽつと建つてゐるのは高地。どう考へても田指すべきは上で間違いなさそうだ。

「ミズハナさんかいそなのは上だ?」

「面白そなのは下じゃない? 年中泳げるみたいだよ

「だから?」

「わかつた。登ろう。私もミズハナさんは上にいると思つた
唯はどこかげんなりとした様子で歩き始めた。

確かに坂は長い。登りきるには骨が折れる。しかし、道標が上を指してゐるのだから諦めるしかない。クーヤだつて登らずに済ませられるならそうしたかった。

進み始めてしばらくすると、クーヤは奇妙なことに気がついた。手入れされた街路樹や明滅する信号など、街並みは生活観にあふれている。ところが大通りを進んでいるにも関わらず誰ともすれ違わない。細い路地を覗いてみても結果は同じだつた。犬や猫が我が物顔で闊歩してゐる分、余計おかしく感じられた。

まるで人間だけが抜け落ちたようだつた。似た雰囲気を感じる場所をクーヤは訪れたことがある。ナズナやスノッブと出会う前の僅かな時間、90s no stop goyaに漂つていた空氣と酷似していた。

「なんだか寂しいところだね」

誰ともなしに唯が呟いた。

管理が行き届いたゴーストタウン。無色に漂白された透明人間の街。ぞつとしない想像だつた。

草生した屋敷の前に出た。ネズミの足跡はその中へと続いている。

クーヤは呼び鈴を鳴らした。それなりに大きな音が辺り一帯に響き渡つた。

「普通、押すかな……」

「だつて、誰もいなさそつだし」

クーヤはそう言いながら、本心では別のことを考えていた。探索を打ち切つて帰りくなつていた。嫌な予感がひしひとしていた。心のどこかで、鉄柵門の向こうの重そうな玄関扉を開いて誰かが出てきてくれるることを願つていたのかもしれない。

屋敷からは誰も出でこない。

鉄柵門に触れると、意外なほどあつさりとそれは開いた。ドアノブを回す。玄関扉にも鍵はかかつていなかつた。クーヤは一瞬躊躇したが、結局は開けることにした。

室内は明るく清潔に保たれていた。埃ひとつ落ちていない。物音ひとつしなかつた。外観からはわからなかつたことが、一つだけ明らかになつた。屋敷には地下室が存在していた。ネズミの足跡は階段を下つていた。そして、その先はやけに薄暗く、見通しが悪かつた。

「ミズハナさん、実は吸血鬼だつたりして」

「私たちは生贊に捧げられる可愛そうな少女つてわけね」地下へと続く階段の前で立ち止まつたクーヤだつたが、唯には帰る気が全然無さそうだつた。そのまま降りることにした。クーヤも段々と楽しくなつてきていた。驚くべき秘密が隠されているかも知れない。期待に胸が高鳴つていた。

はたして地下室には黒い棺が横たわつていた。壁にかかつたランプの頼りない光が室内を照らしている。クーヤも唯も止まれない。嬉々として棺の蓋に手をかけた。ミズハナの秘密にたどり着いた。クーヤは勝利を確信した。セーの、で蓋を持ち上げた。

「あれ？」

「これ、なに？」

二人は顔を見合させた。棺の中には唯が放つたネズミ。それとひとかけらのチーズ。それだけだつた。ネズミは一心不乱にチーズに齧りついている。

背後でバタンと音がした。扉がひとりでに閉まつていた。慌てて駆け寄るが、扉は押しても引いても開かなかつた。

「……やられた」

唯は額を押されて天を仰いでいる。

どうやら尾行は失敗したようだ。まんまと閉じ込められてしまったらしく。

二人で手分けして出口を探すが、どこにも見つからない。それほど大きくも無い部屋だ。まもなく調べ終わつた。

徒労感にへたり込んだ。冷たい地面の感触は気持ちよいものではなかつたが、そんなことは気にならないくらいに期待はずれだつた。唯はネズミの尻尾をつかんでぶらぶらと振つてゐる。餌につられて餌に誘い込まれたネズミはクーヤたちだつた。皮肉が利いていた。

一時間ほど経つたが、クーヤたちは放置されたままだつた。最初のうちこそ諦めずに部屋の中をネズミの一匹すら見逃さないほど念を入れて調べていた唯も、とうとう根を上げて座り込んだ。二人とも黙りこくつたままだ。

唯の心情はよくわからないが、なんだか暗い顔をしている気がする。クーヤはクーヤで微妙な問題を抱えていた。

朝食後と昼食後の一日二回。決まつた時間にスノップから渡された薬を飲んでいるクーヤだつたが、そろそろその効果が切れる時間だつた。

唯にはばれれている節はあるが、それでも確定させてしまうのは気が引けるし、もしもの時に言い逃れできなくなる。薬そのものは制服に忍ばせているが、唯の前で飲むことには抵抗があつた。しかし、男の姿に戻るよりはマシな気がする。

クーヤは唯に背中を向けて、ひとつそりと薬を飲み込んだ。

「何飲んでるの？」

背中に皿でもつてゐるのではないだろうか。クーヤは本気で疑つた。

「じょ、常備薬」

「嘘ついてもわかるんだよ。特にクーヤの嘘は。それにどこも体悪

くないよね」

「栄養剤なんだ。お腹の足しになるかなつて」

「私にもちょうどい」

唯の目はクーヤの手の中にある小瓶に注がれている。上手い言い訳がいつでも流れるようにすらすらと出てくるなら苦労はしない。考えている間に、さつと小瓶をさらわれた。

「どっちがオススメ？　あー、やっぱり良いや。クーヤが赤なら、私は青にしよう」と

クーヤの返事を待たずに、唯は青いカプセルを口の中に放り込んだ。「味はしないのね。こんなでホントに栄養あるの？」

どうせ飲むなら赤いカプセルにして欲しかった。それなら女である唯には無害のはずだ。しかし、青いカプセルを元々女である唯が飲むとどうなるのか。クーヤは男に戻りたい時に青いカプセルを試したことはあるが、同じような変化が体に現れるのだろうか。実はクーヤも知らなかつた。

三分が過ぎ、五分が過ぎても唯は何も言つてこない。

見かけだけでは判断できないが、特に変わった様子も無いよつだ。「クーヤ。つかぬことをお聞きしますが、よろしいでしょうか？」

急に畏まつて唯が隣に座つた。

「もしかして、さつきの薬。栄養剤ではなかつたのではなくて？」逃げようとしたクーヤの肩をガシッと掴んで、地面に縫い付けた力は女のものとは思えないほど強かつた。

「怒らないから言つてみて。ホントは何の薬だつたかを」

「か、勝手に飲むからだろ。常備薬だつて言つたじゃないか」

「それならそつと言つてよ。常備薬で栄養剤だつて言つから飲んだのに」

唯は涙目になつてゐる。すわりが悪いのか、頻繁に腰の位置を変えている。恐らく急に生えた股間のものの扱いに難儀しているのだろう。

「もうやだ。何なのこれ。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪いー。」

クーヤ何とかしてよー。あ、そうだ。赤いやつ飲めばいいんだよね。

「そうだよね」

再び伸びた唯の手を、今度こそクーヤは押しとどめた。

「飲み過ぎると体のバランスが狂つて戻れなくなるかもしれないって。時間が来れば戻れるから、それまで我慢して」

「我慢つて。どれくらい？」

早ければ早いほど嬉しい。唯の目はそう言つていた。

期待には答えたいし、嘘をつくのは簡単だが、裏切りの失望は期待の大きさに反比例する。クーヤは迷つたが、ありのままを伝えることにした。

「……六時間くらい、かな？」

空気がこれ以上重くならないよう明るく微笑んで言つてみた。効果は無かつた。唯は世界の終わりに吹き鳴らされる喇叭の音でも聞いたかのように膝を抱えた。効きすぎる薬が恨めしかつた。

「今日中には戻れないってことなのね。あんまりよ」

「私の立場は……」

「クーヤは女の子だからわからないんだよ。男と女は違うの。私は男の気持ちなんかわかりたくないもん。クーヤのばかーっ！」

胸倉をつかまれてカクンカクンと揺すられる。

そういうえば昔から予想外の事態に直面すると前後不覚に陥る癖があつたなあ、とクーヤは思つた。

「人が大変なことになつてるのに、なんで嬉しそうなのよ。というか、クーヤは可愛い女の子になつて、私は見た目が変わらないってどういうことなのっ！？ おかしくない！？」

「そこ！？ そこなの？ 突つ込むとこ」

「つるせーーーー！」

前後に大きく揺すられてクーヤは気持ちが悪くなつてきた。唯は自分が男になつているのを忘れているに違ひない。力の加減をしてくれない。クーヤはいまにも落ちそつた。

「ギブ！ ギブ！ 力、強くなつてるから。私、女の子だから！」

唯はきょとんとしているが、とりあえず前後に振るのはやめてくれた。クーヤは唯の手首を取つて、自分から引き剥がした。

「そんなに焦らなくても大丈夫だつて言つてるだろ。なんだよ。男になつたくらいで」

「くらいつて。くらいつて……そんなに単純にできでないもん」

「あー、もうわかつた。わかつたから。悪かつたよ」

クーヤは言い捨てて唯から離れると、膝を立ててドカンと座つた。太ももはおろかパンツまで見える姿勢だが、どうせ側には唯しかいない。半ば自棄になつていた。

「……クーヤ、パンツ見えてるよ」

「知つてる」

当てこすりをしたいわけではなかつた。一方的に唯を悪者にして責めたいわけでもない。しかし女のように振る舞いたくもなかつた。自分でも矛盾していると思うが、クーヤは気持ちの行き場を失つていた。

薄暗い部屋に長い間、閉じ込められているせいで精神が参つてきていた。

「クーヤ、パンツ見えてる……」

「だから知つてる」

「知つてるなら閉じてよ」

唯は懇願するように言つた。本氣で恥ずかしそうだ。クーヤは全然恥ずかしくないのに。全く意味がわからなかつた。

「クーヤ、お願ひだから。気になるつていうか、変つていうか……おかしいの。わけわからんないよ」

「おかしいつて？ 何言つてんだ？」

クーヤが聞いても、唯はぎゅっと目をつぶつてイヤイヤをするだけで答えない。

まさか副作用？

クーヤは何とも無かつたが、もしかすると個人差があるのかもれない。心配になつたクーヤは唯の元へ駆け寄つた。

「唯、どこか痛むのか？ できることないか？」

手を取ると温かかった。唯はびくつと震えた。いよいよ心配になつてきた。

「だ、大丈夫だから。平氣だから。たぶんそういうんじゃない」「何言つてるんだ。そんなにひうりうな顔して。隠さないでいいから。力になるよ」

手を握つて唯の前髪をかき上げた。ヒツ、と唯が息を飲むのが聞こえた。額と額をくつつける。体温が高いような気がする。

「クーヤ、離れて。話すから。離れて」

唯の慌てぶりは尋常ではない。しかし、話す氣になつてくれたのは前進だ。クーヤは大人しく従つた。

「なんて、いうのかな。クーヤが可愛いって。そう言えばいいのかな。たぶん、そう。男の目で見ると、たぶんクーヤが可愛いんだと思う。女の時はそんなこと思わなかつたの。自分が、その…」
…美少女力高かつたし」

「それで？」

「それでつて……全部言わす氣？ ちょっと酷いよ

「言つてくれないとわからない」

「だから、パンツが気になつて気になつて仕方なかつたの！ これでいい！ いまだつてクーヤのこと抱きしめたいの我慢してるので、もうダメだ、私」

聞き終わると同時に押し倒されてしまった。

あれ？ もしかして、これはヤバいんじゃないか。とクーヤは思つた。

「どうしたらしい？ ねえ、どうしたら」

「とにかく落ち着いて。落ち着こう。焦つてもいいことはないって。まず落ち着くのが大事。まずはそれから！」

落ち着け、落ち着け、と繰り返しながら、クーヤ自身は焦りまくつていた。

唯を悩ませている原因は明白だ。煩惱の虜になつてしまつたのだ。

無意識が情欲の牙を突きたてろと命じてゐるに違ひない。対象は何を隠そ、この私。クーヤだつた。

「クーヤ。苦しいよ

「だー。落ち着けと/oruに！」

抵抗むなしくぎゅつと抱きしめられてしまつた。唯自身は自分の状態を把握しきれていないらしい。それが救いだつた。しかし、いつまでも悠長なことは言つていられない。クーヤは諦めて実力行使に出ることにした。

「ぐえつ！」

ひき潰されたカエルのようなうめき声を上げて唯は倒れた。ほうほうの態だが抜け出すことができた。だがクーヤの側の代償も大きかつた。唯の煩惱を握りつぶしてやつた。右手が光つていた。

「落ち着けー。落ち着けー」

唯のため、そして自分のために念佛をあげることにした。

うずくまつてゐる姿は見慣れた幼なじみだが、心には獸が巢食つていた。まさしく貞操の危機だつた。花を散らすには早過ぎる。大きかつた。自分のものよりも大きいかもしれない。様々な思いがクーヤの中で交錯してゐた。心臓が早鐘のように鳴つていた。

「ひどいよ、クーヤあ

怨念のこもつた眼差しを向けられてクーヤはたじろいだ。唯は地面に臥したままだ。目尻に涙をためてゐる。

「ゆ、唯が悪いんじやないかつ！ 目が、目がヤバかつた。アレは本気の目だつた。怖すぎ！」

「そんなこと言われてもわかんないよ！ 説明してよ。説明！ 人

のち……大事なところ潰しておいて、そんな言い方ひどい！」

「じゃあどうしたら良かつたんだよ！ あのまま抱かれてたら唯は襲つただろ！ 最後までしたくなつただろ！」

「そんなことしないもん！ クーヤのバカ！」

正座してにらまれるが、怯むわけにはいかない。思い出したくもないが、興奮した男性特有のそれを押しつけられた恐怖は簡単に薄れ

るものではなかつた。しかし、説明したくない。説明すれば何かが解決するのだろうか。わからない。唯のことを傷つける？ わからない。自分は男？ それとも女？ わからない。何もかもわからなかつた。クーザは発狂しそうだつた。

クーザは唯から距離を取つて座つた。座り方にも細心の注意を払つた。

唯のほうからは何も言つてこない。

クーザのほうからも言つことはない。

時間だけが過ぎていく。

冷静になつてくると、自分も反省するべき点があつたように思える。けれども自分から歩み寄るのは何となく癪だつた。ひとまず脇に置いておくことにした。

閉じ込められているから気が滅入つてくるのだ。

クーザは駄目だろうとは思いつつ扉を引いてみた。軽い。頑強に閉じられていたのが嘘のように簡単に開いた。

「クーザ？」

「なんか、開いてるんだけど……」

扉の外に犯人がいる、といふことも無かつた。クーザは首を傾げながら地下室を抜け出した。

「上、調べる？」

「ううん。帰ろう」

クーザが尋ねると、唯は力なく答えた。

外は日が落ちてとつぐに暗くなつていた。

四という数字は死を連想させられるので縁起が悪いという話を聞いたことがある。

その時クーヤは迷信深い人間もいたものだ、と一笑に付した。

現在、クーヤは死者の呪いについて思いを馳せている。

現実逃避だった。

瀟洒な白いクロスが敷かれたテーブルについた人間の数は四人だった。

認めたくない現実。目を覆いたくなる連口。

男女比は三対一。

クーヤ自身をどちらに数えるべきか。それは目の前の男の顔を見れば一目瞭然だった。

白衣アンドスースはいつにも増して上機嫌。

「ハーレム。ついにハーレムが完成した。選り取りみどりじゃないか。これが世に言うモテ期なのか。クーヤ、よくやった。誉めてつかわす」

「……バカなの？　この人」

唯のうろんげな視線に晒されたくらいではスノップの笑顔は崩れない。

クーヤと、そしておそらくナズナも諦めているが、まともに顔をつき合わせるのが初めての唯がスノップの人物像を掴みきれていないとしても、何の不思議も無かつた。

「唯ちゃんなんだよね。二人から色々話は聞いてるよ。噂通りだね」

スノップはニコニコしながら並べたティーカップにお茶を淹れている。

一度、直に会つて話がしてみたい。

唯に頼まれば嫌とも言えず、クーヤはそれとなくスノップを誘つてみた。断つて欲しいというのが顔に出ていたのかもしれない。ス

ノップは迷うことなく誘いに乗った。スノップ経由ですぐにナズナへも話が伝わった。とんとん拍子だった。

「どんな噂ですか？ 気になります」

「クーヤの親友だって聞いてるよ。毎日同じでも一緒になんだって？」

「デタラメ言つなよ。そんなこと一言だつて言つてないだろ」

「ひひひつ。隠すな隠すな。裏は取れているのだよ」

クーヤは誓つてそんな話をスノップにした覚えがなかつた。ナズナにもしたことがない。いつたいどこから漏れたのだろうか。スノップの言動は不可解だつた。かまをかけられただけかもしない。

「ナズナだつて、クーヤのことには興味あるんだから」

「そーですね」

ナズナは表情一つ変えずに紅茶にミルクを注いでいる。角砂糖を一つ摘まんで落とし込んだ。

「さて、冗談はこれぐらいにして。何か聞きたいことでも？」

スノップはまるで唯を挑発するかのように意地の悪い笑みを浮かべた。

「何が目的なんですか？」

「目的ねえ」

考えるそぶりを見せながら流し目を向けられる。

「目的というほどものはないかな。クーヤからかうの面白こじやん。可愛いし」

「……嘘ばっかり」

ナズナがぼそつと呟いた。

「あ！ まさかの裏切り。これは一本取られちゃつたかなあ」

「とともに相手しても疲れるだけですよ。言いたいことしか言わないんですから」

バスケットからクッキーを摘まんでかじつている。皿が合つた。ナズナは一瞬固まって視線を逸らした。

「唯ちゃん、で良かつた？ きみも出るの？ コンテスト」

「出ませんよ。クーヤの応援してます。全面的に」

口を挟むタイミングを計っているが、牽制球の投げ合いで激しくてなかなかスタートが切れない。腹の探りあいは苦手なクーヤだった。「じゃあ僕たち仲良くなきそうだね。クーヤを応援してるのは僕も同じだよ」

スノップのにやけ面を横から張り飛ばしてやりたい衝動に駆られる。クーヤでさえそうなのだから、面と向かって話をしている唯の心中を慮ると同情を禁じえない。

「スノップさんってモテないでしょ」

唯は満面の笑顔で言い放つ。急角度でえぐりこむように肝臓を打つべし。と、専属トレーナーに教え込まれでもしたのだろうか。さしものスノップも顔を引きつらせている。

「言動がイチイチ気持ち悪いんですよ。髭ぐらい剃つたらどうですか？ ナズナさんは優しいから指摘しないかもしれませんけど……ちょっとアレですよ。それに美少女力って何ですか？ 女の子を数字でしか見れないなんて最低です」

「ふ、ふふん。乳臭いガキが何を言いやがりますか」

「その乳臭いガキの美少女力、知っていますか？ 一千五百ですよ。一千五百。もう一度はつきりきつかり言いましょうか？ 一千五百です」

トドメとばかりに叩きつけて、ティーカップを口元に運ぶ姿は貴婦

人のように優雅だった。

ナズナが驚嘆交じりの吐息を上げた。

「感心してないで加勢してよっ！ 狂犬だよ、あの娘」

「えーー。やだよ。悪いのは自分から咬まれにいってるスノップじやん。それに昔言つてたじやない。一度幼女に罵られて踏まれてみたいつて。また一つ夢がかなつたつてことで」

「……平然と捏造するのやめれ。ナズナが言つと嘘に聞こえないだ

る」

スノップは水のように紅茶をがぶ飲みしている。

口出ししなくて正解だったかもしない。唯が味方で良かつたとク

「ヤは思つた。

「あまり期待しないで聞きます。美少女力を簡単に上げる方法はありますか？」

「それを知つてどーするの。所詮数字だよ。あんなもんは投げやりに言つと、クッキーを二枚重ねて口に放り込んだ。ぼりぼりと音を立てて噉み砕いている。

「俺が言つのもなんだけどね。結局は人の好みだからね。一定の指标にしかならないんだ。俺の敷いたレールの上を走らせるの？ クーヤに」

唯を黙らせるにはそれで充分だった。

スノックは興味が失せたのか、ポットからビバビバと紅茶を注いで、ナズナからシユガーポットを回してもらつている。

試されている。

流されるままにコンテストに出場することを決め、そしていま再び流されようとしている。しかし、クーヤはあえて乗ろうと思つた。レールの上だろうとなんだろうと、進むのは自分の意思だ。スタンドバイミー。線路が途切れいたら歩けば良いのだ。

「スノックが敷いた錆びついたレールなんて一日あれば走破してやるよ」

クーヤが言つとスノックは形の良い眉を上げて不敵な笑みを浮かべた。

「いつになくやる気じやないか。やるからには徹底的にやるぞ。美少女の真髄を体に叩きこまれてもいいんだな？ 男の尊厳を失うことになるぞ」

「脅して止めさせようとしても無駄だから。もう決めた」

クーヤが宣言すると、スノックは満足げにうなずいた。

「そうと決まればナズナ！ 教えてやれ。美少女の真髄を…」

「はつ？ 私？ なんで私？ 意味わかんないんだけど」

「美少女力一番高いのはナズナだる。なにか秘訣があるはずだ。ちなみに俺も詳しくは知らん。辱めを受けさせてやればいいんじやな

いか。たぶん

「そんな……」

困ったようにちらちらと視線をよこされる。

クーヤもナズナにそんなふうに見られると赤面しそうになってしまふ。

「なんでもいいけど、やるなら早くやれば」

唯が言った。なぜか不満そうだった。

「唯もやるんだよ。一人より一人のほうが楽しつって」

「わ、私はいいよ。いまのままで充分だつて」

クーヤは唯の右手を取つた。示し合わせたように反対からナズナが左手を押された。

「旅は道連れつて言うしね」

引きずるようにして、三人で歩き始める。

「あ、あれ。俺は？」

「スノツブは男だから関係ないでしょ」

ナズナに冷たく言い切られてはスノツブも引き下がるしかないらしい。

「納得いかねーつ！」

スノツブの魂の慟哭は完全に無視された。

クーヤの目の前にはまな板と包丁。そばにはじやがいもとたまねぎ、にんじんが鎮座ましましていふ。

「ナズナ、これは……」

聞かなくてもなんとなく想像はつくが、まさかということも考えられる。視界の端にコンロがあつて、鍋も置かれてあつて、各種調味料も目に入っているから、ほぼ選択肢は無いに等しいが、それでも聞かずにはいられない。

「クーヤは裸エプロンにする?」

そういう選択肢もあつたか。思わずクーヤは感心してしまつた。状況から料理を、材料からレシピを類推するのは浅はかだつたらしい。

「……この人つていつもこんななの？」

何か言いたそうな顔をしつつも、唯は早速じやがいもの皮をむき始めている。

「あーっ！　ストップ、ストップ。唯さんがやつたら意味ないし。それに裸エプロン見れないし」

「こだわりますね」

「こだわりますよ？」

唯はためいきをついて、包丁をまな板のうえに置いた。どこまで本気かわからない笑顔でナズナから白いエプロンを渡される。

裸は流石に恥ずかしいが、裸で無ければ恥ずかしくない。

クーヤはそう思つて、下着の上からエプロンをつけてみた。

「マニアックー」

「毒されすぎだよ。さすがに」

嬉しそうなナズナと呆れ顔の唯に囲まれてクーヤは後悔した。もしかすると下着のほうが恥ずかしいかも知れない。

しかし、この場にいるのは自分を含めて女性だけだ。男目線で自分を鑑賞する人間は自分以外にはいない。そつやつて自分を納得させることにした。

「ほらほら。これ見て。凄いよ。一千三百だつて。スノックブが言うこともたまには役にたつね」

ナズナの手には美少女力測定機が握られている。表示を見ると確かに数値は上昇していた。機械の精度を疑いたくなつた。

「いやー。こんなので上がるとは思わなかつた。結構いい加減ね、これ」

笑いながら言うナズナを信用しても良いのだろうか。クーヤは不安になる。

「料理の腕には自信あるんだ。任せて」

腕まくりをしてやる気をみせつけてくれるが、聞きたいのはそういうことではない。美少女力と料理にいかなる関連があるというのだ

ろつか。見当もつかなかつた。

「疑つてゐでしょ」

半眼でこりまれて慌てて首をふる。

「花嫁修業してみましょ。私にもわからないんだつて」

投げ渡されたじやがいもはクーヤの手の中にすっぽりと納まつた。

視線を感じる。それも一人や二人ではない。朝から誰かとすれ違うたびに顔を見られている気がして、クーヤは落ち着かなかった。左手の人差し指に巻かれた絆創膏は特訓の証。ナズナの料理教室、名誉の負傷。全く自慢にはならないが、本格的に料理をするのは初めてだった。出来上がった料理 肉じゃが を試食してみると、思いのほか美味しくできていた。しかし、唯は何故か微妙な顔をしていた。味に文句はないと言っていたから、なおさら不思議だった。じやがいもを咀嚼しながら、全く別のことについているように見えた。

ナズナに言うと怒るだろうが、当初クーヤは彼女の特訓をほとんど信用していなかつた。料理スキルを磨くことが美少女力の上昇に繋がるとは、思つてもみなかつた。ところが、現実はどうだろう。注目の的だ。クーヤは改めて自分の美少女力を測定してみると、期待に胸が躍る。

……一千五十。

めまいがしそうだった。

「……こんなはずでは」

「クーヤ、馬鹿やつてる場合じゃないよ」

いつの間にそこにいたのだろう。背後から唯が手元を覗き込んでいた。急いで数字を隠そうとするが、見られたあとで隠しても意味がない。しかし、唯の表情はクーヤの痴態を見て暗く沈んだまま。明らかに様子がおかしい。

「かなりマズイことになつてて。私がドジ踏んだせ이다。『ごめん』
「ちょっと何？ どうしたの？」

クーヤが問いかけても、唯はうつむいたまま答えようとしない。教室のどこから押し殺した笑い声が聞こえたような気がした。実際には聞こえるはずがない。聞かせたくないことを聞こえないよう

にする配慮くらいは誰でも持ち合わせている。だから、それは錯覚だ。しかし、漏れ出た悪意は空気感染する。何よりも、泣きそうな唯の顔がクーヤの直感の正しさを雄弁に物語ついていた。

「ここでは話せないことなんだね？」

「……うん」

クーヤは唯の手を取つた。濃密に膨れ上がつた悪意を肌で感じる。どこか一人きりになれるところはないだろうか。それはひとまず後から考へることにして、教室から飛び出した。とにかくそこにいたくなかった。

階段を下りて避難場所を探す。保健室に逃げ込むことにした。理由は適当にでつちあげれば良い。養護教諭に「気分が優れないそうです」と告げると、一瞥しただけでベッドを指示した。ひと目で訳ありだと見抜いたのだろう。日和見主義とも言えるが、余計な詮索をされないのはありがたかった。

カーテンを閉め切つてベッドに並んで腰をかけると、唯は少しだけ持ち直したようだ。外界からは完全に遮断された。

「話してくれる？」

「うん」

唯はぽつりとうなずいた。中空にスクリーンが浮かび上がつた。動画の再生が始まった。画面全体が薄暗いため、はつきりとは見えないが、二人の少女が絡み合つているのが確認できた。地下室に閉じ込められたクーヤと唯だった。しかし、それは姿かたちこそ似ているが、決して二人ではありえなかつた。言つた覚えの無い卑猥な言葉が乱舞していた。

音声のサンプリングと編集。手法は容易に想像できた。
見るに堪えなくなつてクーヤは再生を停止した。

「クーヤあ」

唯が泣いていた。細い肩を震わせて、声を押し殺して、それでも涙は止められなくて……そんな彼女にかけてやれる言葉をクーヤは持ち合わせていなかつた。ただ肩を抱いて好きなだけ泣かせてやるく

らいしかできなかつた。

こうしている間にも悪意は拡散していく。一度流れ出してしまえば、犯人をつかまえたところで意味が無い。一次、三次放流者……その先まで。永遠にいたちごっこを続けることになる。

自分は女のなりをしているが、それはあくまで仮の姿だ。影響はコンテストで不利になるくらいで、それほど痛くない。唯は違う。傷つけられれば、生身の体が血を流すのだ。犯人が許せない以上に迂闊な自分が許せなかつた。

犯人の目星はついていた。

だが、クーヤは迷う。これ以上騒ぎを大きくするべきなのだろうか。

「クーヤ？」

「大丈夫。なんとかするから」

一人でやろう。可及的速やかに。誰にも気取られることなく。

翌日、唯は学校を休んだ。
音信不通。

クーヤが思つていたよりもずっと唯が負わされた傷は大きかつた、ということなのだろう。話し相手は皆無。清々しいまではぶられていた。延焼の危険を冒してまで、クーヤに話しかけようとする猛者はいない。異様な雰囲気を感じ取つたのか。そわそわしていたアリサには個人的に釘を指しておいた。

空いた時間はスノックから渡されたゲームをしてつぶしていた。空欄が目立つようになつてきていた。恐らく交換をしていないせいだ。ナズナの中ではどういう位置づけなのだろうか。ふと気になつた。そう言えばアリサもプレイしていると言つていたような気がする。……関係ないことを考えている。弱気になつてている証拠だつた。

ウイルスのように増殖する動画を撃退する特効薬は無いものだろうか。

クーヤは上書き保存して電源を落とした。ゲームのようにセーブポイントまで戻つて不都合なデータを書き換えることができれば、と

クーヤは思う。

懲りずにミズハナの身辺調査に乗り出す。

仮に成功したとしても、クーヤたちについた黒いイメージを払拭できるとは思えない。何よりこれ以上泥仕合をする気にはなれない。男であることを暴露する。

インパクトは抜群だが、スノッブとの賭けには敗北することになる。まるでナズナと唯を秤にかけているようだ。気分の悪くなる想像だつた。

蜘蛛の巣に絡め取られたように身動きができないくなっている。唯のことを頼りにしていたんだな。

教室でただ一つの空席を見つめながら、クーヤはひとり思う。

まずはクラスメイトのモブオを放課後、校舎裏に呼び出すことにした。手法は古典的に。靴箱に手紙を忍ばせた。モブオを選んだのは、ミズハナ初来襲の際に、何事もなく唯をクーヤと偽つて教えた前科があつたからだ。モブオは一人校舎裏でうきうきしていたが、クーヤの姿を認めるやいなや露骨に顔をしかめた。予想通りいやつだつた。無記名で手紙を出したのは正解だつた。

「なんだ。よりによつていらないほうかよ」

モブオは悪態をつきながらも、色々教えてくれた。

男子の間で動画はどんどん広がっているが、一部を除いて悪ノリしているだけだということ。ユイがクーヤのために、一人で防波堤を築いていたということ。動画の出所はおそらくミズハナのところだろうということ。ネガティブキャンペーン自体は成功かどうか怪しいといふこと。少なくとも男子の間では、好評を博しているということ。百合カツプルはおいしいらしい。

「ミズハナ陣営についても面白くないんだよね。下馬評だといまのところミズハナの圧勝だぜ。対抗馬というよりは大穴扱いなんだよ、クーヤさんは。なんか変だし。まあ俺は面白ければ何でもいいんだけど。というわけで、今度みんなで飯いこうぜ。アリサと比べられ

るとツライけどさ。君ら一人ともそこそこ人気あるよ

モブオは予想以上にいいやつだった。

「個人的にお付き合いしてもいいぜ」

「遠慮しておきます」

「あー、やつぱり男は顔なのか。ちくしょー」

本気で悔しがつていてるが、おそらくノリで言つてているだけだひつ。一瞬あとには、晴れやかな笑顔を見せる。自分が女なら惚れていたかもしね。

「お付き合には無理ですけど、全部終わったら一緒に泳ぎにでもいきましょうか?」

「そんなこと言つと期待しちゃうよ、おれ」
鼻を鳴らしながら言つモブオは、どこまでも冗談みたいな男だった。彼のことは信用してもいいのかもしれない。

「案外話せるやつだな。クーヤさんは、友達にも根回しどとくね。あんまりはしゃぎすぎないようつけて。モチロン下心こみで」
とにかく味方は一人でも多いほうが良い。クーヤは曖昧に笑つておくことにした。本来の性別は口が裂けても言わないほうが賢明だろう。

何を勘違いしたのか、モブオは楽しそうに笑つている。

「ところで、君たちは実際のところあの通りなの? その……同性愛者? いや、別に君らがそうだったとしても、どうだつてわけじゃないんだけど。ほら、夢は広がるじやん。みんなが一番気になつてるとこはそこだと思つんだよ。君たち異常に仲いいしさ。妄想されて気分悪いとは思つけどさ。その……ここだけの話、教えてくんない?」

「それは下種の勘ぐりとこつやつですよ」

「下種でゲス」

クーヤの白い皿に酔われてても、そして気にならないようだ。どこでも誰とでもこの調子なら、警戒心を持たれることもなさそうだ。羨ましい性格だった。

「眞面目に聞くけど、コイさんが休んでたのってアレのせいなの？
答えたくなければ答えなくてもいいよ。普通に失礼だからな」

「……わからない」

「そつか」

モブオは声の調子を落とした。

「なんか、ありがとうございます。突然相談したみたいになつてしまつて」

「ああ。気にしないでいいよ。俺は学校生活が楽しければ、それでいい人だから。クーヤさんが言つたように下種なんだよ。噂話とか好きだしね」

初めて眞面目な顔をして語るモブオは、どこか恥ずかしげに見えた。

「余計なお世話だとは思つんだけど、コイさんのことをなんとかできるのはきみしかいないと思つ」

そんなことは言われなくてもわかつてゐるつもりだったが、モブオの誠実さにクーヤは背中を後押しされたよつて感じた。

唯に会いに行つ。

素直にそつかえた。

「誰にも言つなよ。このこと。俺のクラスでの立場が悪くなるから」

「ええ」

クーヤは右手を差し出していた。どうこうわけか、自然とそつしたくなつたのだった。モブオは軽く触れるようにクーヤの右手を取つた。そして恥ずかしそうにしながら、足早に去つていつた。心強い味方ができたような気がしたクーヤだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2805w/>

90s nostalgia

2011年11月24日21時54分発行